光国祭

ＧＴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光国祭

【Ｎコード】
Ｎ１９７０Ｎ

【作者名】
ＧＴ

【あらすじ】
各都市対抗魔法合戦的な小説です。作者的ご都合介入もあると思います。

ゆるーい展開を夢想してますので、暇つぶし程度にでも。

1（前書き）

はじめまして。作者です。
この作品が初投稿となります。読み辛い点や言い回し、誤字脱字等見受けられると思います。そこは目を瞑って頂くかご指摘頂ければ唄って踊って喜びます。

1

ワアァァァ――――

割れんばかりの歓声、溢れんばかりの喝采、天まで届くが如く鳴り響く足を踏み鳴らす音。

周囲には円形に広がる階段状の席に、所狭しと密集している人、人、人。老若男女関係なく、在る青年は飲み物を片手に、ある子供は菓子のようなものを両手で、ある老夫婦は顔を見合わせ二人で会話をしながらに。

「さぁ、今年も開催が決定されました！早いもので、あれよあれよと第５回！ご覧ください！今皆様方の目の前に現れたのが、今年のこの宴の選手たちでございます！どうか皆様！盛大な拍手と共にこの者達を歓迎いたしましょう！」

そんなアナウンサーらしき女性の言葉に、より一層辺りの喧騒は音量を増す。手を打ち合わせて、声の限りに、時には体を思う存分駆使してその言葉に答えようと。その反応に、アナウンサーらしき女性も「ありがとうございます！ありがとうございます！」と、その喧騒に呑まれまいと声を張り上げて答える。

それに対し、そんな歓迎を其の身に受けている『選手』達の大半は、明らかに困惑し、放心していた。

ある青年は視線を周囲に向けながら、ある少女は震えながらその場にうずくまり、ある老人はその少女を可愛そうに思ってか、肩を擦ってあげ、ある少年は今にも泣き出しそうにし、ある女性はそれでも気丈に振舞おうと腕を組みながら仁王立ちし、ある中年男性は不機嫌を隠そうともせずに喚き立て――

そして僕はそんな中で放心しながらただ聞こえてくる喧騒に反応もできず、ただひたすらに突っ立っていた。視線も定まらず、口も半開きのままに、あまりの急展開に着いていけずに。そして思う。

『どうしてこうなった』

お盆を跨ぐ大型連休が始まり、今年就職したばかりの僕はそれほど久しぶりでもない実家に帰省するべく愛車のバイクに乗って渋滞の予想される高速を避け、国道をメインに只管走った。とはいえ、それでも渋滞が無い訳ではない。距離的にも、信号での停止などもあり、帰省にかかる時間は多くなる。その上土産物の一つでもと途中寄り道も繰り返すために、なお更に実家に辿り着く時間は遅れる。

「まぁ、たまにはこんな感じで走るのもいいわな」

それでも一日で辿り付けるだろうという僕の予想も虚しく、途中で宿を取っての帰省となった。翌朝早くに宿を出て、これ以上土産も要らないと、寄り道することなく帰途に着いたが、それでも実家にたどり着いたのは昼過ぎという時間になった。

「ただいまー」

という久しぶりの実家でのあいさつも、疲れからかやる気のかけらも無い消え入りそうな声。そんな息子を見た両親は、久しぶりに帰省した息子が、就職先でなにか問題でもあって暗いのでは？と心配しはじめていた。それに対してどこか投げやりな感じではあるが、

ただの渋滞疲れだと説明して、僕は自分の部屋へと重い足取りで歩き始める。
自分の部屋に辿りつくと、不思議な開放感を感じた。久しぶりでは在るが、やはり自分の部屋のというのは落ち着くものなのだろう。手に持っていたヘルメットをソファに放り投げ、服を脱ぐのも億劫に、そのままベッドに倒れこんだ。

このときの僕はかなり疲れていたんだと思う。いや、思うどころではなく、実際かなり疲れていた。でなければ、その違和感に気がついた時にはもう少し警戒をしてもよかったんだと思う。
ベッドに倒れこむその時に、布団の上には何か奇妙な丸い模様が描かれていたのだ。それが疲労から来る目の錯覚という可能性もあったかもしれない。けど、実際にこの様な状況になっている以上、あれが全ての始まりだと、断言できる。

そう、その時ベッドに倒れこんだ僕は、それと同時に意識を失った。そう、倒れたと『同時』にだ。
あぁ、神様。もしこの状況をご覧になられてるのでしたら、どうか私の前へ、その御姿を現して頂きたい。

思いっきりぶん殴ってやるから

2

気がつくと、周囲は薄暗くなっていた。寝たのが昼過ぎのはずだから、かれこれ6時間以上は寝てたのか？と考えていたが、なにか違和感を覚える。単純に夜の暗さというよりも、何処か閉鎖された部屋のような？

そんなことを考えていると、不意にガサリ、という音が耳に飛び込む。

母親か？と思い、ゆっくりと瞼を開いていく。それと共に視界に入ってくる景色に、あぁ、僕はまだ夢でも見てるのかもしれない、と思った。

広さ的には学校の教室を三つくらい？ぎ合わせたような無駄に広い空間。天井はそれほど高くなく、壁も床も全て石作りの部屋。入り口と思われるドアは木製で、其のほかに窓などの開口部は存在していない。そんな暗い部屋を照らしているのはいかにも前時代的な火の揺らめき。ランプではなく松明のような篝火であった。

そして、そんな部屋には僕の他にもかなりの人数が居た。が、そこにいる人全員は意識を失っているかのように体を横たえたまま動く気配も無い。キョロキョロと視線を彷徨わせ、顔や体つきを確認してみるも、知ってる人など誰もいなかった。はて？これは本当に夢なのだろうか？とも考えてみたが、それ以外にこんな場所に自分が居る理由がない。あんな拷問のような帰省を体験した後なのだ。こんな不思議な夢を見てもおかしくないのだろう。そんなことを考えて僕は無理やりに納得しようとしてみた。

何時になったら目が覚めるのだろう？とやることもなくぼーとし

ていた。それが打ち切られたのは、僕の他にも体を起こし呻っている人の声が聞こえた時だった。ぱっと見た感じの印象は好青年、歳は僕より上だろう、二十台中盤か後半。ゆっくりと頭を振りつつ、僕が体を起こしたときにした行動と同じことをしていた。と、その視線がふいに止まる。理由は簡単。其の視線の先では、僕がそちらを見ていた為。視線が交差する。

「ここは・・・・・夢か何かか？」

そんなことを目の前の青年は話しかけてきた。やはりそれ以外考えられないだろう。うんうん、と僕は腕を組み、自分の考えは間違っていないことに感慨深げに頷いた。そんな僕を目の前の青年は、何か胡散臭い物でも見るような視線で見つつ、「まぁ、夢だしな」とぼそりと呟いた。あれ？ちょっと胸が痛い。

「君は誰だ？俺と何処かで会った事あるのか？」

「いやぁ、僕はここに居る全員見覚えないんだよね。夢だとしても、そんなことあるのかなぁ？」

「他の・・・・・・。俺も誰一人わからんな。なんだこれ。変な夢だな。ちなみに君の名前は？」

「僕？僕は――――あれ？名前思い出せねぇ。どーなってんだ？ちなみにそっちの名前は？」

「名前が思い出せねぇって・・・・・・、いやいやいや。なんだこれ。俺も自分の名前がわからんぞ？」

どーなってるんだ？と二人で顔を見合わせる。と、其の話し声が

思いのほか大きかったのか、周囲ではまた何人かが体を起こし始め、また僕が最初に行ったように周囲をキョロキョロと見回し始めていた。

「なぁ、こいつらも俺らみてぇに自分の名前わかんねえのかな？」

「うーん、僕たちだけ、てことはないんじゃない？これが夢だとして、誰一人見覚えないし」

そんなことを僕と二人で、やや声音を控えて話している間にも、一人、また一人と意識を取り戻し始めていた。気がついた時にはその場に居た半数近くの人が体を起こし、何処か呆然とした表情で周囲を見回している。と、ふいに目の前の青年が立ち上がる。

「なぁ、こん中で俺のこと知ってるやつ居るか？なんでかしらねぇけど、俺自分の名前も思い出せねぇんだよ。できれば俺も、皆の名前を聞いてみたい。覚えてる名前もあるかもしれねぇし」

ふむ、と僕は頷いて視線を巡らせる。其のやや大きな声に反応するかのように、また一人、という具合に次々と体を起こし始める人が居る中で、すでに意識を戻し、今の言葉を聞いていた人達は青年に顔を向けると、不思議そうな顔で見つめた後には、そのほぼ全員が困惑したような表情に変わった。

「私はあなたを知らないわ。てか、なんで？自分の名前が・・・・・・」「ワシも見覚えが無いのう」「おじさん誰ー？」「いやいや、お兄さんだ。お　に　い　さ　ん。な、まだ若いだろ？おじさんじゃないだろ？さわやかだろ？」「何気にしてんだ？てか、なんだここ？名前？どーなってんだ？」「私も面識ありませんねぇ」「フヒヒ、カオスカオス」「名前・・・・・・・」「てか、あんただれだよ。

俺は・・・・・・？はぁ？どーなってんだ？」

徐々に収集がつかないほどの喧騒に発展し始め、それと共に意識を取り戻して体を起こし始める者の速度も上昇を開始。ちょっとした騒ぎが始まって二分もしない内に、ここに居るであろう全ての人が体を起こし、辺りに聞こえる会話を耳にしてか、自分もと考えるような仕草をしたと思うと、やはり全員が困惑の表情を浮かべていた。

「だぁ！一回ストップ！落ち着け！整理しよう整理！そこのガキ！何だうっさいおじさんってのは！心に響くんだよ！やめてよ！いや、やめろよ！なんだよ！隣の姉ちゃんまで！地味に痛いんだよその言葉！いや今はそれはいいよ、うん。ギリギリ我慢できるし。それよりまずは整理しよう！」

笑い声と共に指まで指されたり、何か可哀想なものでも見るような視線を向けられたり、どこか神妙な面持ちで現状を推理しているように無視されたりしながら、青年がその場に胡坐を掻いて座ると、すっと指を一本立ててから口を開いた。

「解ったことから確認しよう」

そう切り出して始まった内容はこんな感じ。

まず、やはりというか全員が自分の名前が解らない、または思い出せないということ。

互いに顔見知りという人が居ない。似たような人という感じはあるが、話してみるとやはり知らない人であるとわかるだけで、誰一人として互いに覚えているものは居なかったこと。

年齢、性別もまちまちで、下は十二歳から上は６５歳までと、規

則性が見受けられないこと。
職業的な統一性もないだろうということ。学生がやや多いが、普通科の人がやはり多いというのは問題無いとして、専門科目の人も数人おり、社会人にしても平の人、管理職の人も居り、専門技術職の人も同職の人が居たりと、そこにも規則性は見受けられなかった。社長は何故か居なかった。

「こんくらいか？他なんかあるか？」

そんな感じで、現状解る事を纏めて話した後、他には何かあるかと声を掛ける。
ふむー、と僕は小さく呻りながら考えてみる。確か盆休みで帰省して。その時の疲れでぐったりしてたから、着替えもせずにベッドに――――
そういえば、あの時何か違和感感じてなかったっけ？確か模様のような何か・・・・・・

「ちょっと聞いていいかな？えっと僕がこの夢？の世界に来る前、帰省で疲れてベッドにダイブする時にさ、何か変な模様？なんていえばいいのかな？とにかく、その時違和感があったんだ。疲れてて気にするほどでもないかって思ったんだけど、皆はそんなことなかった？」

そんな僕の言葉に、首を捻る人が大半だったなか、何か思い出そうとしている人が数名いた。それを見てあれが何か関係あるのか？と少し考えてみる。

「ねぇ、それって、なんか丸い、緑色っぽいやつ？」

「ん？あぁ、色は覚えてないけど、確か丸っぽかった気がする。」

「私も見た気がします。ぼやけて見えたけど、緑色で、丸というか・・・・・・うん、丸っぽかったです」

そんな会話にうなずいている人が何人かいたけど、全員が見た、ということでもないらしい。しかし、それでも偶々ここにいる数名が同じ経験を、と考えるほうがなにか奇跡的体験な気もする。もしくは、考えたくないけど意図的な・・・・・・。

「他なんかあるか？なんでもいいんだ。とりあえず何か意見をくれ」

「・・・・・・出身地は？これはどうも忘れてないようだ。ちなみに私は生まれも育ちも今現在住んでいる場所も福島県だ」

其の言葉に成程と頷きあい、僕は、私は、俺は、ワシは、オイラは、うちは、と明々好き勝手に話し出す。「フヒヒ、カオスカオス」という呟きが聞こえた気もするが、確かに其の通りな光景だった。

「だぁ！ちょっと待てって！一旦落ち着け！こらガキ！またお前か！お兄さんだ！次おじさんって言ったら泣かすぞ！ちょ、隣のお姉さん、何その二人でアイツ泣かそうかって。ほんと勘弁してください！いやそうじゃなくて！とりあえずここ無駄に広いんだし、地方別に分かれてみよう。東北、関東、関西みたいに」

それを聞いた皆は最初こそ戸惑いはしたものの、一人が立ち上がり、また一人が、と動き始めるとこっち北陸ー、とか、九州はこっちー、北海道どーすんだ？とか口々に言い合いながら移動を始めた。移動が終わったころ、その小集団ごとに会話をしていたとき、そのうちの何名かは、そこにある規則性に気が付いた。

「・・・・・・もしかして、各都道府県毎に一人づつ、てことか？」

そんな呟きが誰かの口から漏れた。それは確かに呟きにしか聞こえないような声量。だが、誰一人としてその言葉を聞き漏らしたものはおらず、其の瞬間に今までになかった静寂が生まれた。

そう、そんな時だ。まさにその瞬間を待っていたかの如く、この部屋に一つしかないドアがギイィ、と不気味な音を立てて、ゆっくりと開き始めた。ゴクリ、と誰かの喉が鳴る音が聞こえ、辺りには一瞬で緊張が広がる。

カッ、カッ、カッ

と靴を鳴らしながら歩く音が聞こえ始め、そのドアの向こうから明かりが此方に近づいてきているのが目に映る。その明かりは入り口の側まで来たとき、不意に掻き消え、其の数秒後には謎の人物が部屋の中へと入ってきた。其の人物は入り口を潜ると此方に視線を移し、ゆっくりと右腕を持ち上げる。そして、先ほど呟きが聞こえた方を指差す。

「・・・・・・大正解」

そういうと、再び入り口の方へ体の向きを変え、歩き出すとまた元のようにドアを閉め。

「・・・・・・何だったんだ、今のは？」

其れに対してその場に居た全員が首をコトリと傾げ、誰一人答えることもできず、そんな謎な対応をするためだけに現れ、其の後すぐ消えていった男が出入りしたドアを見続けていた。

2（後書き）

各都市＝都道府県　での変則魔法合戦です。
次話はルール等の説明に移りますが、奇抜さのみ目立つ為それ魔法でいいのかよ、という意見も出るかと思います。まぁ、うん、僕も思います。
誤字、脱字のご指摘、感想、意見等ございましたらドンドン送ってください。
泣いて唄って踊って喜びます。

3

呆然とドアを見続けていると、またそのドアが開き始める。そこから現れたのは先ほどと同じ人物。が、其の手には先ほどは持っていなかった物が握られている。

何処かで見たことのあるような、片手で持てる程度の小槌の形をしており、その色彩は無駄に豪華さだけ目立つ金色。なぜそんな物を持っているのだろう？

「はい！というわけでですね！皆さんコンバンワ！いやどうもはじめまして！私が貴方達を此方の世界に招いた者です！好きなことはこの国の国王狩り！嫌いなことは、一杯！特に私をいじめるメイドが居まして、そいつがまた何とも、あすいませんほんとかんべんしてくださいもうにどとこきゅうしません・・・・・・・」

先程現れた時の何処か得体の知れない不気味なほどの雰囲気とは裏腹に、今回現れた時は馬鹿みたいにハイテンションだった。そのギャップに唖然として碌に返事もできず、その話された内容も右から左になりそうだった。なんとかその内容を聞き漏らさないようにと思っていると、変な事を口走り始め、かと思うとその一言、一言と話す速度と比例する如くガクンガクンとテンションを落とし始めたと共に体育座りをし始める。其の顔も打ちひしがれた、何ともやるせない表情に。

「その、どんまい。気持ちは解るさ。俺もさっきまでイジmゲフンゲフン・・・・・・な。だから元気出せよ」

呆然としていた僕を尻目に、かの青年はその人物の側まで歩み寄り、同じような表情を浮かべつつその人物の肩に手を掛けていた。

あぁ、なんかお互い解り合えたように硬く抱きしめあい始めた。何だろうこの三文芝居じみた光景は。これで涙とか流し・・・・・・どこまでだよ、あいつら。

「すまない、取り乱した。いかんな、どうにも暗いことばかり考えてしまう」

「そんな時もあるさ・・・・・・。それより、さっき言ってたことだが、詳しく聞かせてくれるか？」

おお、何気に誘導し始めてる。先程も現状の確認などで取り纏めを率先したりと、どうやらこの青年は其の類のことには優秀なようだ。性格に目を瞑れば頼れる兄貴に違いない。性格に目を瞑れば。

「そうだな・・・・・・。さて、何から話そうか。まずは謝罪からだろうな。何の了承も得ずこちらの都合で集まって貰ったのだから。説明させてもらおう。ココは君達の居た世界では、無い。異世界と言うことになる。君達の世界は科学という文明が進み、こちらには無い発展を遂げているということだったな。こちらの世界は魔法というものが存在する。一つ見せておこう」

そういうと、先程のダークたオーラを何処へ廃棄したのか、それでもやや空元気な感は否めないが、落ち着いた口調で話し始める。その人物はすっと目を瞑る、と同時に体から緑色の、オーラのような物が漂い始めていた。それは徐々に大きく、また大きくと量を増やし、其の人物が目を開けると右手に持つあの無駄に豪華な金色の小槌の周囲に集まり始める。

「サーベルタイガー」

ぼそり、と呟かれた其の言葉と同時に、其の右手にあった無駄に豪華な金色のあれの周りに漂っていた緑色のオーラのような物は、徐々にその形を変え、次第に大きく、また一回り大きくと、見る見るうちに体長2メートルを超える程の、まるで虎のような形状に変化して行き、見たことも無い程の長い牙を持つ凶暴な獣の姿へと変容していた。

「とまぁ、わかりやすい様にこんな魔法にしてみた。魔法は便利なものでな、いや、便利と言うより寧ろこの世界には無くてはならない物ということだ。だからといって、この世界の全ての者が使えるというわけでもないのだが」

そういい、右手をその虎の頭へと乗せる。ニャーという在りえないくらいその凶悪な姿に似合わないそれはそれは途轍もなく可愛らしい鳴き声で鳴いたその虎らしき生き物は、触れられたと同時にまたあの無駄に豪華であの色なあれに戻っていた。

「ということは、俺たちは何だ？お前さんにこっちに、その、異世界に召還されたってことか？」

「そうなる。だがまあ安心してくれていい。別に元の世界に戻れないとかそういうことは無い。この召還も今回で五回目になるんだが、こちらの世界に居るのも長くて此方の世界での日数で五日くらいだ。とは言え、それも此方の世界で、というもので、元の世界に戻るときには、あちらの時間経過としては精々一日寝て過ごした程度の物だ」

「ふーん。まぁ戻れるならいいんだけど。てかここ夢の世界とかじゃないのか・・・・・・。で？その間俺たちは何するんだ？なんか理由有って呼ばれたんだろ？」

「・・・・・・今回は喚き散らすだけの者が居ないのだな。話しやすくて助かる。そう、理由がある。君達の世界の者をこちらに呼ぶと、必ずその体に魔力を宿して召還されるのだよ。原理等はわからないのだが、一度たりとも魔力を持たない者など現れていないんだ。そこでうちの馬鹿王がな・・・・・・。国民の娯楽云々言い始めたんだ」

「娯楽？」

「そう、娯楽。君達に魔法を使った闘技をしてもらうという物だ。この国には昔使われていたのだろう、コロシアムがあってな。そこで君達には観衆の前で勝ち抜き戦をして貰う。優勝者には報酬もある」

コロシアム、という単語にギョっとする者が多かった。それもそうだろう、あまりにも物騒な感じしかしない。近くに居る者と顔を見合わせたり、何でそんなことを、と悲痛そうな表情を浮かべたり、今言われた言葉が理解できないように首を傾げたり。

「・・・・・・つまり、殺し合え、と？」

「あぁ、いや、そんなことはない。君達の使う魔法には、これもどうゆう仕組みなのかわからないのだが、変わった法則があるらしくてね。例えば君が隣にいる少女に魔法をぶつける。するとその少女は『ぎゃふん』と言ってその場に座り込むだけなんだ。こればかりはどう説明して、何だその変な顔は？」

ゆっくりと分かりやすいように話始めていたその人物は、不意に周囲から向けられた視線に言葉を切ると、其の顔に浮かぶ表情を見

て困ったように疑問を口にした。
うん。僕だけじゃなく、きっと皆同じようなことを思っているんだろうな。今時ぎゃふんて・・・・・・。そんな状況想像してみて・・・・・・あぁ、何だろう、ものすごく恥ずかしいな、これ。

「続けても？・・・・・・うん、そうか、まぁ原理はどうなっているのか検討もつかないのだが、今までそれ以外の結果が得られていない。ちなみにその魔法を食らった相手はそれから丸一日の間、どうもそれ以外の言葉を言うことが出来なくなるらしい。時間の経過で戻るらしいのだが」

その言葉に、年少の者以外は居心地の悪いような顔をする。かくいう僕もそうだ。何だ其れ、あまりにも間抜けすぎないか？いや死ぬよりはいいだろうけど、それでもそれを一日我慢しなきゃいけないとか、まぁ確かにここには見知った者は居ないんだけど・・・・・・。でも嫌なものは嫌なんですよ。

「何か、やる気が無くなる光景が広がりそうだな・・・・・・。それ、本当に娯楽なのか？」

「まぁ、起こる結果はその、何だ。それを見て笑うというか、まぁ受けは悪くないんだが、娯楽という意味で言うならもっと別の理由が大きい。どうにも君達が使える魔法というのは、見た目が多彩というか、見栄えがいいというか・・・・・・ともかく派手なのだよ。だから観衆も沸き立つ。あの馬鹿も私にせっついてくる」

「なるほど、ねぇ。まぁ死なないってんなら楽しめるかもしれないな。で、どんな感じでやるんだ？総当り？トーナメント形式？ブロック別？」

「去年からの形式となるだろうな。去年は八名毎に予選を行い、そこから勝者を一人出す。そしてその勝者を集めて本戦としていたのだ。この形式をとった理由がどうにも賭けをする為とかでな。今年はそれも踏まえてより盛大になるだろうと思う」

「ふーむ。ちなみに優勝者がもらえる物ってどんなの？あー、今までの優勝者が貰ってたもの教えてくれるだけでもいいけど」

「そうだな・・・・・・。初めてのときは国王より名誉の殿堂入りを許可されたな」

「・・・・・・いらねぇ」

「二回目の時は優勝者が確か右腕が義手というのだったか。変わった絡繰りではあったが、望めるのなら元の腕にということで、私の魔法で復元した、といえばいいかな」

「なに其の万能な魔法」

「三回目は、どうもこちらの世界に住みたいという変わり者だったな。それを了承した上で貴族位付きで居住許可を」

「まぁ、嬉しいかどうかは個人によるなあ」

「そして去年だが。ちょうど君くらいの年代の女性でね。素敵な恋人がという願いだった。それならとその女性の好みに合う男性と結ばれるまで好意が集まりやすくなる魔法を」

「優勝します」

その言葉に対する反応はかなり早かった。無駄の無い対応、付け入る隙の無い程華麗な言葉尻のインターセプト。それを唖然としながら眺めていた僕だけど、不意に漂ってきた冷気のようなものにチラと横に視線を向けると、数名の女性からやる気が漲りだした気配を感じた。いやもう感じたというよりは視認できるレベルだった。あれ？あの小学生くらいの少女の背後に何か黒い・・・・・・・あぁ、背後の中年おっさんおびえてらっしゃる・・・・・・。あのお姉さんの隣にいらっしゃる御老体、顔色があの世色に近く・・・・・・・。

うーん、僕は優勝したら何を望もうか？現金な話、預金通帳の改変とかできるのかな？それが無理だったら、新しく車で「フヒヒ、専属メイド」も・・・・・・やる気出してる人多いなぁ。

「さて、魔法の使い方について説明しよう。君達が使える魔法は、全て言霊によるものという説が有力とされている。存在の言語化、その言葉に魔力を宿し、それを顕現する、という説明でわかるかな？そして、特徴としては一度使った言霊は再使用できないらしい。例えば、先程私が変化させた『サーベルタイガー』だが、一度あのように使用した後は何度その言霊を唱えようとその変化は起こらない、というわけだ」

ふむふむ。これはこれで記憶力も関係するわけだ。咄嗟の場面で使いたいときに思い浮かぶ言葉が多い人程有利というわけか。

「言霊には規則性がある。何度召還してもそうなんだが・・・・・君達の国には、都道府県、という国内の境界毎に四十七の地方があるそうだな。召還の度に集まる者はその地方から各一名となっているわけだ。そして使える言霊というのがその地方の有名な言葉、知名度というのだったか、それに依存しているらしい。知名度の高い物ほどより効果の高い魔法となるわけだ。その言霊によってどんな魔法となるかは自分で使ってみるまで解らないのだが、一度使うと

もう使えなくなる。その辺は互いに同じ条件であるため差がつくこともないだろう。ようは臨機応変な対応、自分の地方の知識、あとは度胸次第だろう」

成程成程。しかし知名度の確認とかはどうなんだろう？此方の世界の住人が僕たちの世界の知識などあるのか？今回で五回目といってたけど、そこまで知識があるとは思えないような。それと自分の地方の知識といっても、これは明らかに子供とか不利なんじゃないか？いや、子供だけじゃないか。長年上京等で自分の地元から離れていた人も不利かもしれない。

「あぁ、言い忘れていた説明をしよう。さきほどの知名度というものだが、これは各予選でも本戦でも、その場にいる人間での知名度になる。例えば同じ空間に八人いたとする。そこで『魔法』という言霊を誰かが唱えたとしよう。自分は知っている、ここに居る他の十名、二十名も知っているとする。が予選のその場にいる誰一人知らなかった場合、その知名度は自分一人分、という扱いとなり、その魔法の効果は思うほど望めないとなるわけだ。が、先程も説明したように、その言霊によって起きうる効果はどのような物か予測が出来ない。自身の身体強化という場合もある。知名度に関係なく、余裕があるときは自分だけの知識という物もバンバン使ったほうが有利になる場合もある。まぁ、本戦も見越して考えるなら、其の辺りは駆け引きになるだろうな。自分の引き出しと相談というわけだ」

なるほど、つまりは周囲の人間を観察し、どこまでの知識を持っているか予想してということか。これはこれで頭を使いそうだ。男性なら？女性なら？子供なら？老人なら？趣味も違えば好みも違う。職業によっても知識の方向は違うだろうし、もちろんその人の趣味次第ではまた違ってくるということだ。

「さて、今日はこの後少し顔見せに闘技場へと移動して貰うわけだが・・・・・・そうだな、これも今伝えておいたほうがいいだろうな・・・・・・。一つだけ、この宴、『広告祭』を行う上で君達の今後に影響がある。まぁそれも優勝者以外、ということではあるのだが・・・・・・」

そんな感じで歯切れ悪くその人物は話し始めた。話すべきか、話さないでおくべきか、そんな迷ったような表情もまた、ここまで言われた後だとかなり気になる。次に続く言葉を皆視線を一箇所に固定したまま静かに待ち続ける。そんな僕達を見て、その人物は意を決したかのような表情になり、ゆっくりと口を開き始めた。

「敗者には、なぜか罰則と思われる物が付随されるのだ。こちらがどうこうしようと変わることなく付随する、し続ける、な・・・・・・それは」

徐々に言葉を区切りながら、押し出すようにゆっくり、一言、また一言と言葉を紡ぐ。焦れ始めた誰かが喉を鳴らす。僕も何故か手に汗を握りながら聞いていた。

「異性にモテなくなるんだ」

その言葉だけはスラリと吐き出され、それとともにその空間には絶叫、いや阿鼻叫喚が木霊した。何処かの青年の声が取り分け大きく響き渡った。

そして――、一瞬視界がホワイトアウトしたかと思う暇もなく、気がついた時には僕達の周囲は割れんばかりの喧騒に支配された別

の空間に放り込まれていた。

3（後書き）

誤字、脱字のご指摘、感想、意見等貰えましたら唄って踊って喜びます。

4

「さて、それではここにお越しの皆様に簡単では御座いますが、明日から始まるこの宴に関する説明を私がさせて頂きます。ご存知の方も多いかと思いますが、ここで行われる宴、『光国祭』についてですが、これを承認、主催をしておられますのがご存知我がドンラブ国国王、アシタカ＝ラ・ホン＝キダス陛下です」

其の言葉に、見るからにＶＩＰ席という観客席上部に位置し、無駄に豪華な空間の中で、無駄に豪華な椅子に悠然と腰を下ろし、無駄に豪華な衣装をその貫禄の伺える体躯に纏い、そしてなんかもう色々残念な顔をこちらに向けたまま、スッと右手を持ち上げてアナウンサーの言葉に答えていた。

その何でもないような一動作に観客は割れんばかりの声援で答えていた。

「そして今回の宴の実況を担当します『お嫁さんにしたいアナウンサーＮＯ．１』アンケート第一位、『今最も注目を集めているアナウンサー』第一位、そして！『世界美少女コンテスト』第３位！私カワイ＝コチャンと、解説は昨年同様Ｓ・Ａ＝ディスト氏でお送り致します！Ｓさん、よろしくおねがいします」

「ディスト、でいいですよ。はい、よろしくお願いします」

先程とは違った種類の歓声が広がる中で、やはり僕は放心したまま、動くことができないでいた。

急展開。そう、正に急展開だ。それも過去に例の無い程の。高校生時代、タクシーに轢かれたことが有ったけど、あの時ですら右腕が骨折していたのに「慣れてますから、大丈夫です」と言ってその

まま自転車で普通に家に帰って居た。その時の体験すら何でもない展開で有るかのように。
今回のことは付いていくことすら出来ない。先程から聞こえる言葉も耳に入っては右から左。正に置いてけぼりという感じしかしない。

「さて、解説のディストさん。今回も開催されることが決定した光国祭ですが、やはり集まった選手は性別、年齢共に様々な様ですが、やはりこれは優勝者の予想には関係ないことなんでしょうか？」

「はい、そうですね。ご存知の方も多いと思われますが、ここに集まっている『異世界の魔術師』の選手達の使う魔法は特殊です。『言霊』による制御という噂なのですが、その効果を決定し得る物がこちらの世界の魔法とはかなり違います。我々の常識では、魔法とは自身の魔力、魔法の特性把握、そして扱う技術次第でその魔法の効果、威力、規模、継続時間等が変わります。しかし、ここに召還された選手達が扱う魔法は全く別の原理でその効果が変わるんです」

「ほう、それはどの様な？」

「はい、それが、『致命度』という物です。致命度が高ければ高いほど発動する魔法の効果は増大するというものです。例えば私とコチャンさんが闘技場で対峙しているとします。私が『メスブタ』と言葉を言います。その言葉がコチャンさんの中でどのくらい致命度があるかによって、その威力が変わる、というものです。
今年も去年と同じく八人毎の予選、その勝者による本戦という形式をとるらしいので、予選ではそこに選ばれた八人で、致命度の高い言葉を選ぶとより効果の高い魔法が期待できるということですね」

「では、致命度の高い言葉をより多く覚えているものが優勝できる

ということですか？」

「そうなんですが、そこに制限がついています。出身地の言葉のみ使用できる、というものと、一度使用した言葉には魔力が宿らない、さらに使用する魔法の効果は使用者にも解らない、というものです」

「変わった制限ですね」

「そうですね。しかし、だからこその老若男女問わず平等に近い魔法戦が行える、とも考えられます」

「なるほどなるほど。自分が知っているだけではなく、相手の知っていそうな言葉も予想しなければならないと言う事なんですね。それは見ごたえが在りそうではありますが、しかしこの人気の秘訣はそこではないですよね？」

「えぇ。ご存知の通りこの人気の秘訣は、ずばり見栄えの素晴らしさがダントツであげられると思います。幻想的な光景、神秘的な光景、摩訶不思議な光景、様々な光景を紡ぎだす魔法であり、そしてその効果は相手の体を傷つけ血を流すことも無く勝者を導き出すのです。敗者のあの姿には背筋に昇るエクスタシーすら覚えれる程の光景も見られます。これで人気が出ないわけは無いでしょう」

「確かに。さて、それではここで去年の映像を少しばかり映したいと思います。これからお見せするのは昨年の光国祭でもっとも白熱したと言われる予選第３試合、試合経過から５分後の『予選の英雄』ｖｓ『最強都市』による、本戦進出を掛けたタイマンガチンコ魔術合戦の模様をご覧に入れたいと思います。その間、ステージでは明日から行われる予選の組み合わせを行いますので、結果が出るまで映像をご覧になりお待ちください」

台風、とでもいうように感じたアナウンサーと解説の言葉の応酬が終わったと思うと、周囲にはゆっくりと暗闇が広がり始める。徐々に徐々に明るさを落としていく様はまるで映画館にいる時の様に、次第に手元がようやく見える程度にまで照度を落としていく。

ブン、と小さな唸りが頭上から聞こえたと思い、僕はふと視線を上げた。そこには先程何回も見たことのある無駄に豪華な金色の小槌らしき物体が緑色に近い色を周囲に纏いながらクルクル回転していた。

未だ意識も虚ろなままにそれを凝視していると、其の回転は次第に速度をまし、それに伴って周囲を漂っていた緑色のそれは密度と範囲を増していく。それが徐々に肥大していくと――

「さて、諸君。君達にはこれからすぐに予選の組み合わせを行ってもらう。A、B、C、D、E、Fという六つのグループに八人づつ、まぁその内一つはどうしても七人になるが、その選出をする。これからそれについて説明しようと思う。此方に集まってくれないか？」

その言葉で視線を集めたその人物は、いつの間にかこのコロシアムの中央に立っており、その人物の前には正方形のテーブルらしきものが置かれていた。そのテーブルの上には紙か何かに数字が書かれており、『1』から始まる其れは『47』と書かれている物が、縦六列、横八列に数字順に並べて置かれていた。

いかにも不本意ながら、という感じで数名が動き出し始めていた。中には鼻息も荒く「優勝、優勝・・・・・・」と念仏の如く繰り返す青年やら少女やら若いお姉さんやら三十路のお姉さんやらが目に入ったが、そんな人は半数もおらず。

ノロノロと動き出した多数派の僕は、其の言葉に従いこそしたものの、視線は先程から頭上に映し出され始めていた映像に釘付けになっていた。

「集まったようだね。それでは説明しよう。ここに、『1』から『47』まで書かれた札がある。この札には既にAからFまでのグループ名が刻み込んである。まぁ見えないようになっているが。それを手にした瞬間、そこに書かれている数字がグループ名の表示に変わると捕らえてくれて構わない。先着順で札を手にして構わないから、誰でもいいからまず手に取ってみてくれ」

其の言葉に顔を見合わせる人が多い中で、やはりというかノリノリで手を伸ばす人が数名居た。誰とは言わないけど。それに手を触れた瞬間、AやDという風に数字から英字へと変更している光景を見て、次第に近くに居た人から順に手を伸ばし始めていた。

次々と、着々と決まっていく予選の組み合わせを他所に、僕は未だ頭上の光景に釘付けになっていた。

そこに映し出されていた光景は確かに幻想的だった。色取り取りの色彩に、大きさも巨大な物から小さい物まで。流れるような動きをみせるものや、一瞬にして飛んでいく弾丸の様な動き、そして、そのなかで一番眼を惹かれたのは――

「君で最後だ。残っているのはこれだけ。これに手を触れて貰えば今日は終了だ。明日に備えて休んで貰うことになる。残り一人という時点で結果は解る。だが、だからといってこのまま終わるというのも締まらないしな。急かすのも忍びないのだが、これに手を触れ

て貰えないかね？」

その言葉に、僕はふと今何を言われたんだっけ？とゆっくり思い出すようにしながら、あぁ、と小さく呟くとテーブルにポツンと残されていた札に手を載せた。途端、其処から光が上がり、頭上に映っていた映像が切り替わる。Ａから順番にＦまで横一列に並び、その英字の下には都道府県の名称がずらりと並んでいた。途端に沸き起こる歓声、ある県の名前を声の限り叫ぶ声援、アナウンサーのお姉さんの組み合わせを読み上げる声、周囲に広がる戸惑いの呟き、あるいは決意を胸に、自分を鼓舞するように自分の頬を張る音、イガイガとした怒声、不敵に聞こえる笑い声、微かにきこえる眼鏡をずらす音、ため息、衣擦れ――――

「それでは、以上で準備は終了となる。明日の予選開始までは各自個室にて休息となる。部屋は多少狭いと感じるかもしれないが、そこは我慢して貰うしかない。移動に関しては私の体に触れると、その瞬間に部屋に移動できる。休みたい者から私に触れると良い」

其の言葉にいち早くこの場から去りたいというように数名が小走りに近寄り、肩の辺りに手を伸ばし、触れた、と思うと其の姿は消えていた。それに続いて五人、十人、と続々と周囲から人が減り始める。

気がついた時にはそこには五人ほどしか居なかった。

「・・・・・・例年、何人かはこのように残る物なのだな。君達もまた、何か疑問でもあるのかな？」

口元に浮かぶそれは苦笑のように見られるが、その瞳はどこか嬉しそうな色をしていた。その言葉に対してすいと体を前に出したのは、銀縁眼鏡を掛けたエリート然とした青年。

「例えば。県境、その地方を跨ぐ様にある名称の物は、どの様な判定になるのでしょうか？」

「ふむ、それについて答えよう。そこに地名度があり、その地方の物と認識されていればそれは効果を発揮する。しかし、境を越え隣の地方の人間が同じ言霊を紡いだ瞬間、その効果は霧散する。ということが過去一度だけあった。確定ではない以上、過信は出来ないだろうが」

その返答を聞いて一つ頷くと、その眼鏡エリート青年は相手の体に手を伸ばし――次の瞬間にはその場から消えていた。その場に残っているのは僕を入れて四人となる。

「ねぇ、罰則ってのはどうやっても回避、というか、何とかならないの？それがなけりゃ楽しめるんだけど」

そんなことを口にしていたのは、大学生のようにも見られる綺麗な顔をした女性だった。僕よりもやや歳は上に感じられるけど。その綺麗な顔をやや難しい表情に変えながら、どこか縋るような視線で其の人物を見ていた。

「こればかりはどうにもならんのだよ。確定、というより、前例ではそーだろうということなんだがな。前年の優勝の褒賞に対して、その埋め合わせの如く逆の効果を次の年の敗者が被るらしいのだよ。名誉を得辛くなったり、怪我をしやすくなったり、とね。前年の褒賞から考えると、まず今年の敗者は・・・・・・」

その言葉尻は濁すように消えていたが、それ以上は言わなくてもという意思表示のごとく、その女性は首を力なく左右に振ると、す

たすたと歩き出して、其の手を持ち上げ――この場から消えていった。

「さて、残っているのは君達だけだが。何か聞きたいことでもあるのかね？」

「あぁ、いやさ。気になったことあんだけどさ。3回目だっけ？優勝者の奴がこっちに住んでるって言ってたよな？そいつって今どーしてるんだ？」

そんな砕けた話し方をしていたのは、あの性格に眼を瞑れば頼れそうな青年だった。

「・・・・・・聞きたいか？」

「ん？あぁ、できれば」

「そうか・・・・・・・。いや、そうだな。実はな、家のメイドをやってる」

「・・・・・・は？」

「この世界では高位の魔法使いの結婚に関してちょっとした決まりがあってな。その国の異性としか結婚ができないのだよ。それで、その・・・・・・な。いや確かに私としては反対というわけではないのだがな。いかんせん、私はこの国の魔法使いとしては頂点の位置にいるだけに、その仕来りも無碍に出来ずにな。それを聞いた彼女が、『それならメイドで住み込む』と言い出し始めて・・・・・・。あぁ、それでまぁどうでもいい情報かもしれないが、君達が此方の世界に住むと、その魔力量はかなり異質な存在となる。はっきり

と言えば私の上を行く。だからまぁ・・・・・・サカラエナイトイウカサッシテクダサイ」

「え、あ、あぁ、うん。その、うん。がんばれ」

先程までの貫禄をかなぐり捨てるようにその場に体育座りのように蹲り、顔を膝の上に乗せて負のオーラを放ちだした其の相手に、其の青年は居た堪れなくなったのか肩を摩ろうとして――其の瞬間には消えていた。え？この空気残して行くの？てか今のは素で触れたら飛ばされるっての忘れてただけじゃねえ？とかグダグダ考えていた。あぁ、残ったのは僕とこの人だけか・・・・・・。

「その、顔を上げてください。大丈夫ですよ。きっと。それより、質問してもいいですか？」

そんな僕の投げやりな慰めの言葉に、彼は体を動かすことも無くボソリと「どうぞ」とだけ答えた。うわ、暗いなぁ。

「先程の映像ですけど、『最強都市』というのは、東京ですよね？」

「うん、毎年優勝候補だよ」

あぁ、言葉使いにも覇気が微塵もない！どうすれば元に戻るんだろう！ていうか、この人この国の魔術師の頂点とか言ってたけど、こんな姿衆目に晒して大丈夫なのか？

「えっと、それじゃぁ『予選の英雄』についてですけど、これはやっぱり・・・・・・」

「うん、君の地方のことだよ」

やはり、と僕は思った。先程見た光景の中に、一際幻想的な光景があった。確かに派手さ等それ以上の物もあったけど、やはり自分の居る所の物があれ程美しい光景として映し出されたときには、心を奪われたかのような思いだった。

「『予選の英雄』というのは？」

「そのままの意味だよ。本戦には一度も出たことが無いんだけど、何時もおしいところまでいくんだよね。しかもその魔法も派手な、というより幻想的な光景が多い。『最強都市』は逆に威圧的な光景が多いね」

成程、やはりそんな感じか。まぁ、本戦にでたことがないというのは流石に先代選手達に対しもう少し頑張って欲しいとか思いはした物の、それでも『予選の英雄』等と呼ばれるほどには善戦しているのだからそれ以上は、と考えた。というか自分も最低限其の名に恥じないくらいには善戦しないと。

とはいえ、目の前のこれどーしよう？うーん。まぁ、放置でいいか。

考えが纏まったところで、僕も休むべく其の人物に向かって歩き始める。

さきほど流れた映像、後半の二人きりで対峙している場面が脳裏に蘇る。『最強都市』の二十代半ばらしき女性と、『予選の英雄』の高校生らしき少年。互いにかなり知名度の高い言葉の応酬をしていたかのようで、繰り広げられた魔法は観客を沸かせ、その効果を相殺しあいながらも数十分と対峙していた。其の光景にあってその二人は――

そっと目の前の人物の肩に触れる時、僕もあの映像の二人と同じように、これから起こる光景を夢想し、期待に瞳を輝かせて口元に笑みを浮かべていた。

4（後書き）

拙い文でごめんなさい。これが僕の限界です。

ここから先の展開はまだ未定です。最初は東北は東北で予選、北陸、関東、近畿とやっていこうと思ってましたけど、ランダムにしました。

予選も全部書くかも未定。一応『予選の英雄』というのは作者的に自分の出生地のことは書きやすい為、適当な二つ名つけて有利っぽいイメージつけただけで。

今後の掲載は不定期となります。そして僕は文才が無い為投稿速度は期待できません。ごめんなさい。

誤字、脱字のご指摘、感想、意見等貰えましたら唄って踊って喜びます。

5

ちゃぽん――という水の跳ねる音と共に僕は両腕を湯船の中に降ろす。ふぃーっと深く息を吐き出すと、それと同時に幾らか疲れが吐き出されたような気もして、少しだけ幸せそうに微笑む。

手を伸ばして触れた、と思った次の瞬間には眼に映る景色のあまりの落差にしばし動くことができなかった。

耳に痛い程の喧騒が、今度は逆に不気味なまでの静寂となり、組み合わせ抽選の表示をしていたホログラフのような魔法を見やすくする為だと思われる、周囲の暗さに眼が慣れていたのに対し、この六畳程の個室にある篝火の様な照明が、急に目の前に現れた為、軽いパニックとなっていた。

それでもゆっくりとこの変化を飲み込むように気持ちを落ち着かせていく。段々と気持ちの揺れ幅が落ち着いて来たので、今度は体をほぐす様に軽く柔軟運動を開始する。手首をブラブラ、首をグルグル、腰をグイングインと、足首をブルンブルン、と。

ふぅ、と一つ深く息を吐き出した後、とりあえずはという感じでその部屋を眺め回してみた。やはり窓のような開口部は付いていないが、それほど大きくないドアが一つ。寝具は木製のシングルサイズ。照明は篝火の様な物がドアの脇に一つだけ。ほかにはベッドサイドに水差しらしいものと鉄製らしきグラス。それ以外には家具らしきものもなく、何も無い空間が広がっているだけ、という部屋だ。

うーん、まだそこまで眠いわけでもないし、どうしようかな？と考えて、やはり最初に眼が行ったのはドアだった。トイレかなんかだろうかな？とドアの方に足を向ける。取っ手に手をかけてみるが、やはりドアノブなどはなく、視線を目線の高さに移すと小さな閂の

様な物が見える。それに手を掛け閂を外すと、ドアはキィッと小さな悲鳴を上げるだけで外側に開いていった。

ドアを開けた先にあったのは幅が二メートルもありそうな長い廊下。部屋から出て最初に目に付いたのがそれだった。そしてその廊下に接するようにずらりと並んだドアが見える。何かに似てるような？と僕が思案して、思いついたのはプレハブ住宅を横一列に並べたような光景。

そんな考えを振り払い、さてトイレ等はあるのかな？と僕がテクテク歩き始めると、突き当たりはT字路になっており、そこの壁には落書きがされていた。明らかにマジックで書かれた物が。

『↑　？　　トイレ　↓』

「・・・・・・風呂、もあるのか」

↑のすぐ脇に書かれている温泉マークに少々驚き、僕の口からそんな呟きが漏れた。黒いマジックによる落書き。きっと先代達による置き土産的な物なのだろう。其れを見た時何故か此処が異世界であるということを忘れたような暖かい気持ちが込上げた。ただの落書きなんだけど。あ、下の方に『落書き禁止』って書いてある。同じ黒のマジックで。

それでもこちらの風呂という物には好奇心が沸き、誘われるようにフラフラと其方に歩き始める。ドアが見え、其れに近づくにつれて水の流れるような音が微かに聞こえ始める。取っ手に手を掛け、閂は、と視線を移しても何も無く、押せばいいのかな？と押し込んでみたものの動かず、手前に？と引いてみたものの動かなかった。んん？と思い、試しに横に、と力を入れてみると、少し重い手ごたえと共に横にスライドしはじめた。

そうか・・・・・・引き戸ですかそうですか・・・・・・。

「おぉぅ」

目の前に広がる光景は、一言で言うなら絶景。どうもこの場所はそこそこ高い山の中に在るようで、視界の先は抜けるような夕闇と、深い樹海の光景が広がっていた。足元には石畳が広がり、左右にも石造りの壁が三メートル以上もの高さで並んでいる。その石畳のスペースだけでも軽く最初に居た部屋位の広さがあり、その中で湯気を上げている湯船は、例え５０人が同時に入ったとしても足を伸ばして寛げるだけの広さが見て取れた。

「何やってんだ？　おぉぅ！無駄に広ぇ風呂だなおい！」

そんな今までの感慨も情緒も木っ端微塵に吹き飛ばす大声に、大変迷惑そうな顔と視線を後ろに向けると、その表情も視線もバッサリ無視し、尚の事僕を押しのけて風呂の方へ誘われるように歩いていく青年が現れた。と、其の後ろに眼鏡の青年も。確か福島の人だっけ？

「こんばんわ。いやぁ、凄いですね、これは。トイレはあるのか、と思って歩いてたんですが。しかし、これ脱衣場とかはあるの？というより、混浴、なんだろうね」

挨拶に会釈とともトイレはあっちっぽいですねと軽く返し、其の後に続く言葉にはて？と周囲を見回す。あ、壁際に棚と籠がある。タオルとかもあるのかな？しかし、男女の仕切りは・・・・・ないね。うん、微塵も無い。時間別に使えばいいのかしら？あらあら、どうすればいいのでしょう？

「さて、私は行きますね。少し惜しい気もしますが、まぁ、明日の予選後にでもまた来ればいいかな」

後半自問するようにそう呟いた。まぁ、この景色も素晴らしいけど、確かに規模がすごいからなぁ。日本にこんな広い露天風呂とかあるのかな？と僕が考えていると、眼鏡の青年は僕の後ろを困ったような顔で見ていて、それでは、と会釈を残してトイレの方へ歩いていった。トイレも共用とかなのかなぁ。後で覗いておこう。

「あれ？あいつ行っちゃったん？」

そんな言葉に振り返ると、既に裸体の好青年が居た。右腕にはそれまでその体を猥褻物陳列罪から護っていた衣服を抱き、どこか楽しそうな表情で「入らないで行くとは勿体無い」と呟いた。

そんな青年にこれみよがしに大きな溜息をプレゼントして、先ほど見かけた脱衣入れらしき棚の方を指差した。それを眼で追い、こちらにまた視線を戻すと、満面の笑みで頷いた後、其方のほうへスキップでもしそうな勢いで小走りし始めた。子供じゃあるまいし、と苦笑しつつ、僕もその後に続いた。せっかくだし入っていこう。

「しっかし、奇想天外、て感じだよな、ほんと。誰が最初に考えたんだろうな、こんなこと」

二人で独占するにはかなり広すぎる湯船の中で、色々な気疲れやら思考過多による頭の疲れを癒すべく無気力に体を投げ出していると、ぽつり、と呟くような其の言葉が聞こえてきた。

確かに、僕達は五回目、と言ってたっけ。だからまぁ、ある程度のことは説明してもらえたし、待遇にしても慣れているような感じ

で、こうしてみると概ね不満などもない。気になるようなところもある程度ではあるが説明も受けているし、こうしているくらいの自由もある。それでも、やはり最初のときは、と考えると、それはどーだったんだろうか？

「なぁ、大概さ、異世界召還とかって奴は救世主的な物語じゃねえ？　俺らの場合は娯楽らしいけど、当初の目的って、やっぱそんな感じだったんかね？」

何処か子供のような笑みを浮かべ、楽しそうに、嬉しそうにそんな言葉を紡いでいる其の青年に、僕としては困った顔を返すしか出来なかった。確かに、去年の予選の映像で見た光景、あれを軍事的に活用したとしたら、敵性勢力の無力化にはうってつけな気もする。それこそ各都道府県から一人づつ集まった人間が、一斉に魔法を放つとしたら、それは豪華絢爛な光景と共に・・・・・・そうか、聞こえてくるのは『ぎゃふん』という言葉か・・・・・。締まらないなぁ。でもまぁ、無力化からの戦場の平定はできそうだな。

うーん、でも、確かに当初はその目的だったんじゃないのかなあ？そう考えると召還術式というのか？それだけは受け継がれていて、軍事利用はせずとも、娯楽には向いているのでは？と考えた誰かの手で異世界召還が復活したとか？

「まぁ、僕の考えだと、当初はそうだろうね。召還魔法、でいいのかな、それ自体は今回が五回目ではないだけかもね。今年で五回続いているからと言って、あおれはあくまでお祭りが。てことでしょ。それ以前に無かった訳ではない、かもしれない。それが遥か昔なのか、一回目で戦争が終わって、勿体無いから次の年からお祭り目的で第一回が開催されたのかも。もしくは其の一回目で戦争が終わって、そのまま第一回のお祭りがはじまったのか」

そんな僕の考えに、返事をするでもなくただ体を伸ばして聞いていた彼の青年は、それから暫くはそのまま声を発することも無く静かに考え込んでいるようだった。其の間も似たような内容のことを僕は適当に喋っていたんだけど、うーん、もう少し反論なり自論をこう・・・・・。疲れた、この辺で話を締めよう。

その後の静かな数分も、再び入り口の引き戸が開く音で終わりを告げる。結構個室の外が気になって探検に出てる人が多いのかな？さて誰だろう、と視線を向けると、その人物の視線とばっちりぶつかった。

やはりというか、戸惑っていた。僕なんかかなり動揺してるんだし、それだけの変化に留めているだけ彼女のが肝が太いのか、人生経験が豊富なのか。というか、隣のこいつは何で無反応？あ、見てないだけですか。いや、もう少し気にしようぜ？そんなことを思いつつも、少し考えてから口を開く。

「もう少ししたら、出ますから。男と一緒だとゆっくり出来ないでしょ？」

「んー・・・・・・。いや、別にいいよ。どうせこの後もまた人が来たりしたら変わらないし。それだったら少ない時に入っちゃったほうがいいかな。早めに寝ておきたいし」

其の言葉は予想外だったため、すぐに返答できなかった。え、僕タオルも何も持って来てないんだぜ。どうしよう、と一生懸命言葉を探していたら、隣からチャポンという水音が聞こえる。何だどうした助け舟か？と隣に視線を移すと、其の青年は未だ相手に視線を向けるでもなくただ上を見上げたままに、右腕だけを持ち上げ、先ほど僕たちが衣服を仕舞い込んだ棚を指し示すように持ち上げていた。それは僕に対しての助け舟ではなく、あの女性に対しての反応だと理解して、それからおいこらちょっとまて、何勧めてんだよと

軽い頭痛を覚えた。
女性はそれを見、それから視線を移すと軽く頷いた後其方へトテテと歩き始めた。なんだろう、追い詰められた、という気がするのは僕だけなんだろうか？あ、タオルを広げてる。本気だ。本気でこっちに来る気だ。
あーでもない、こーでもない、と考えながら、天を仰ぎ見たけれど・・・・・・。再び聞こえた水音に視線を移すと、無駄に広い湯船は、更に一人分の広さを失っていた。それでも未だに余裕はあったけれど。いや、逆に僕の心の余裕が一人分減った気がする。僕の心の広さは四畳半くらいだと思う。

「うーん。確かにそれが一番可能性高いかもね。でも毎年やるってことは、興行としても成功してるってことでしょ？主催が国王ってところから考えてもさ。確かに市民のガス抜きにもなるだろうけど、結局国益ってことじゃないの？」
先ほど僕達がしていた会話のことを話すと、それでは何故その祭を続けているのか？という内容に移行していた。考えてみると、何でだろう？という話ではあったのだけれど、そう言われてみると確かにしっくり来るものがあった。あの国王、なんか覇気とかそんなのは無かったけど、そう考えれば確かに一国の王としては捨てきれない選択だろう。あの闘技場に居た観衆だけでも、かなりの数だった。それも熱狂的なほどであったのだから、毎年のごとく期待して来ているのかもしれない。それこそ多少の入場料くらいは気にならないほどに。あの広さだと、丼勘定でも何万人という単位で収容できるだろう。一人５００円だとしても・・・・・・。いや、僕が考

えることじゃないか。

「それに一回目と三回目だっけ？その優勝者以外は報酬が魔法で如何こうできたんだし、国家としては丸儲けだったんじゃない？」

あぁ、そう考えると・・・・・・。あの魔法使いの人、苦労人ポジションだなぁ。家でも何か色々あるっぽいし。まぁ、確かに美形だし、能力も国家の頂点とかだし、難しそうな性格っぽいけど、パッと見だと渋いダンディーという印象もあるし。うーん、でもそー考えると？一回目の名誉の殿堂とか、金掛かってないだろうし、二回目も魔法で身体再生？を解決。三回目も爵位と居住権だけ、去年も魔法でモテ子ちゃん作成。

うわぁ、国王儲けてんなぁ・・・・・・・。いや、彼が苦労してるだけか？

「丸儲け、だねこれは。だとすると・・・・・・優勝の報酬の話の時、金でもなんでも好きなものを、と言わなかったのは・・・・・・考えすぎかな。でもまぁ、最後のあれは、何故か誘導っぽい気もするな」

「え？マジで？どういうことよそれ」

と、今まで反応の薄かった青年が、ここぞとばかりに反応を示した。いやね、もっと早く行動してよ、ほんとに。僕は対人会話スキルがかなり低レベルなんすよ。それも異性だと数倍下がるというほどに。兄弟みんな男、其の上男子高校卒業者の僕に今までこの状況を丸投げしてからに、こいつは。そんな気持ちの全てを視線に乗せて射竦めるように青年を睨んでみたものの、え、何？的な表情を浮かべられただけで、それより早く続きを話せ的な視線を返される。あぁ、胃が痛い。

「つまりさ、僕らは最後残ってたでしょ。その時、その三回目の優勝者があの人の家でメイドやってるって言ってたよね？　そこからの入れ知恵も考えられるんじゃないかってこと。国益を絡ませないで報酬を掲示するには、何がいいかってことかな。それこそ似た理由であの人の家でメイドやってるんだろうし、それが報酬なら、と考えたのかもってこと」

その僕の言葉に神妙な面持ちでゆっくり数度頷いてる青年に、激しい違和感というか、似合わないから、という言葉をなんとか口に出すのを留めながら話続ける。対して正面にいる女性は考えるような表情で静かに聴き続けていた。あ、そういえばこの話の時は僕らしかいなかったっけ。この人はこの話が出る少し前に移動しちゃってたもんなぁ。

「だとしたら、あれか？分け前よこせ的な事言っても無駄ってことか？」

「無駄じゃないかもしれない、けど。こっちの通貨がどんな物かもわからないわよ。それに褒賞の授与が国王とその近辺の者だけがいる場所での謁見とかになると、煙に巻かれる可能性もあるしね。入場料云々は所詮私たちが個々で空想しただけでしょ。根拠というか証拠がないわね。迷惑そうな顔を拝んで終わりじゃない？」

「いや、それでもいいんじゃね？実際俺ら迷惑したんだし言うだけ言っといても。なぁ、そうだろ？あれ？そう、だよね？」

「え、あー、うん。そう、なの、かも、ね？」

「いやいや、そうじゃない？！　優勝したらってのはわかるけど、

結局はあれだろ？当たると三億円貰えるって宝くじを買う気も無いのに勝手に財布から金を取って宝くじに変えちゃいました！的な話だろ？」

気がついた時にはそんな感じで僕を抜かした二人であーでもない、こーでもないと言葉の応酬を繰り広げていた。宝くじの話はどこか的を得ている気もするなぁ。当たるのは一人。買う気も無いのに財布の中身がすっからかん。ははは、笑えねえよほんと・・・・・・。

しかし、なんだろう、この二人の会話が続いている。傍目にも既に上下関係が見て取れるのも少し面白い。

片やこの青年を弄ぶようにニヤニヤとした表情で楽しそうに言葉を放つ美人な女性。対する青年は、見た目こそ好青年、ではあるが、性格的になんというかな三枚目的な少し残念な青年。年代的にもつりあっていそうで、この二人が結婚していると言われても違和感も無く頷くことができそうな雰囲気で。しかも話の内容が聞こえていない他人が見ると、明らかにお似合いの美カップル。

そう、遠目に見ているだけで内容を聞いていなければ。

「いやいや、それは関係ないだろう。第一なんで俺が将来禿げる事前提で優勝狙わなきゃいけないんだよ！」

「え？見た目？きっと禿げるから優勝したら死ぬまで禿げませんようにって言えばいいと思うよ」

「いやいや死ぬ前ははげてもいいよ！ぶっちゃけもう５０くらいから禿げてもいいよ！それより若い時の思い出が大事だよ！」

「あー、モテそうに無いもんねぇ」

「やめてよ！解っても言葉にしないでよ！言葉の暴力だよそれ！」

「暴力じゃないよ。武力よ！私、暴力って嫌いなの」

「どう違うんだよ！いや確かに語感から負のイメージが抜けたけど！威圧感は変わんねえよ！」

「あっはっは」

うーん。なんというか、楽しいそうだ、というか傍目に見てるだけの僕も楽しいな、この光景は。なんか彼そのうち『ぎゃふん』とか言い出しそうだ。あぁ、なんて切羽詰まった顔で抗弁してんだろう。必死に言葉を探しては心に響いているような言葉に抗戦し、じりじりと押されている彼を見て

「二人は付き合っちゃえばいいんじゃない？」

と僕はその考えを頭の片隅に留めて、おけずに不意に口にしていた。

ぴたり、と風呂の中に飛び交っていた言葉の応酬が止まり、二つの視線が僕へ突き刺すように向けられた。あれ？やっちゃった？と居心地の悪い気持ちで体中から汗が出てきたように感じた。きっと長いこと湯船にいたからだろう。だといいなぁ。あぁ、胃が痛い。

「いや、あの、なんというか、楽しそうだったし？　傍目にはだけど」

そんな僕の搾り出すような言葉は、縋るような視線と共に、女性の方へ向けて吐き出していた。うん、きっとこの場を納めれるのは彼女だけだろう。それと同じようにどこか呆然としたままの青年も同じように視線を女性に向けている。そんなことあり得ないよね？

的な視線を飛ばしているようだ。
其れに対して、其の女性は、何故かニヤニヤと意地の悪そうな笑みを浮かべて悪戯っぽく考え込むように人差し指を顎に乗せて、「そうだねぇ」と呟いていた。あぁ、なんだろう、自分のことではないけど、こうなった以上無関係でもいられないのにこの待たされている間というか、時間というか、空間というか。

「ちょっと聞いていいかな？こっちの世界の記憶って、戻ったときに残ってると思う？」

あいかわらずニヤニヤと意地悪っぽい笑みを浮かべたまま、そんな言葉を言うとやはり楽しそうな視線ではあったが、どこか挑むような雰囲気でその疑問を口にした。
対して、僕達は。

「え？普通に残ってんじゃねぇの？報酬とか貰えるんだし。確かに、あっちに戻っても一日寝た位の時間しか経ってないかもしれねぇけど、それで夢だと思うにしちゃこっちで五日も過ごすとなると、流石に忘れねぇんじゃねぇの？」

「・・・・・・いや、逆に五日分の記憶をあっちの一日で記憶に残せるものなのかってのも気になるね。残ってたとしてもうろ覚え程度に残る、とか？うーん、そう考えると、どっちとも言えないな」

「そんなもんかねぇ」

僕達は難しい顔をしたまま思い思いに考えを言葉にしていく。それをニヤニヤ笑いからニコニコという笑いに変えた女性が楽しそうに聞いている。それからも色々考えては見るものの、やはりどちらとも言えないような考えしかでてこなかった。

「確かに、こんな感じだとこっちで何か約束してもあんまり意味がねぇかもなぁ」

「そうなんだよねぇ。でもまぁ私は確定させる方法はある、と思うよ？優勝すればだけど」

「あぁ、成程。確かにそれだとできるかも。まぁ僕はどっちでもいいんだけどね。で？話を戻すけど、記憶が残るとしたらどーなの？」

空気が変わったのをこれ幸いと、再び先ほどの話題を掘り起こす。あ、ニヤニヤ笑いが僕にも伝染っちゃった。一瞬青年が僕の方へ殺気の篭った視線を投げかけてきたが、その時女性が体を動かした為に生じた水音にビクリと肩を揺らして視線を変える。

其の表情も死刑宣告を待つかのように少し顔から血の気を引かせたような、赤い数字でこれじゃだめだろう的な数字の書かれたテストを親に見つかったような、そんな表情に変えて。

それに対する彼女の返答はごくあっさりと紡がれ

「うん？私はいいよ？」

と可愛らしい仕草で微笑んでいた。おぉ、なんか奇跡な気がしてきた。先刻まではお似合いなんじゃとか思ってはいたものの、改めて考えてみるとやっぱ無理かな？とか遠慮も何もない考えだっただけに。

対してその返答を受けた青年は、あぁ、なんか現実として受け止めていないという顔だ。きっと僕と同じように軽くあしらわれると思っていたのだろう。あ、きょどってる。

そんな青年を他所に、うん、と伸びをした後、そろそろ寝るねー、とその女性は返事も待たずにそそくさと湯船を出て行った。其の表

情はほんのり上気しているように見えたけど、はてそれは長湯の為か、今のやり取りに寄るものか。

引き戸が開かれ女性が出て行った後、相も変わらず呆然とどこを見ているのか定かでない視線で佇んでいる青年に、僕は軽く溜息を吐いた。何だかな、いや僕も同じこと言われたらそうなるかもしれないけど、そりゃ僕は女性に慣れてない・・・・・・こいつも同じなのかな?見た目いいのに、あ、性格か?

と、そこまで考えた辺りで流石にかなり長く湯船に浸かっていたことを思い出し、青年の肩を揺すると風呂を出るべく告げた。相変わらず反応は、あ、ちょっと動いた。うーん、なんでこういつもいつも僕の周りには面倒だけ残るんだろう・・・・・・。胃がやばい。

これ見よがしに大げさに溜息を吐きながら、その青年を強引に連行して着替えを済ませ、僕達は明日に備えて自分の部屋へ向けて歩き始めた。

いよいよ明日からか。色々考えてみたものの、結局ここまで来た以上、もうどうにもならないだろう。それならいっそ暗い考えは放置しよう。生き死にも関係ない、終われば戻れる。それだけわかれば十分だ。うん、それが解っているなら十分じゃないか。そうとなれば早めに寝よう。

明日からはきっと、今日よりもっと楽しい時間が待っているだろうと期待しながら。

5（後書き）

次話から予選に入ります。作者は見聞の広いほうではないので『僕』の絡む予選と本戦だけにしようかな、というのが現状の考えです。

できればそのぅ、地元の情報とか、近隣のこういうのはこっちでは割と有名なんだぜ的な情報を教えて貰えれば助かります。

ちなみに『僕』は青森選手です。

誤字、脱字のご指摘、感想、意見等貰えましたら唄って踊って喜びます。

6（前書き）

ごめんなさい。もう、ホントごめんなさい。

6

「ご来場の皆様こんにちわ。いよいよ、いよいよ予選が始まります！本日これより行われるのは予選ＡからＣまでの三戦となります。開始までもう少々の時間がありますので、ここで少し予選の見所を予想してみましょう。さて、解説のディストさん。本日の予選、見所は何処になるでしょうか？」

「はい、皆様こんにちわ。解説のディストです。さて、ええそうですね。今日は初戦からもう見ごたえがあるのではないでしょうか？何といっても予選Ａに『最強都市』の名前がありますからね。これは期待できるでしょう」

「そうですね。やはり予選Ａでは『最強都市』が勝ちあがると思いますか？」

「まずそうでしょうね。過去四年に渡っての成績からみて、まず高確率で勝ち上がるでしょうね。なんといっても優勝二回。そうです、未だ四回しか開催されていないこの光国祭において、その半数がこの『最強都市』が優勝を飾っています。今年も優勝候補筆頭でしょうね」

「今年の『最強都市』の青年は、えっと見た目的にあれな気もしますが、なんというか覇気というか負のオーラがビシビシ出てますね。やる気が漲っている、ろいうことでしょうか。確かに期待ができそうです。さて、予選Ｂ、予選Ｃについてはディストさん、どの様な展開が予想されますか？」

「そうですね。予選Bですが、これも面白い組み合わせとなりましたね。『予選の英雄』と『北の番人』の名前がありますね。私としては今日の注目はココが一番ではないか？と思っています」

「確か過去に一度だけ、この名勝負がありましたね」

「えぇ。第三回までの光国祭においての予選は今よりも規模が大きかったんですよ。予選がA，B，Cと三戦となっていまして、丁度倍の人数による予選でした。それでこの勝負があったのが第二回のときなのですが・・・えぇ、あれは戦略的には有効でしょうね。『北の番人』と『予選の英雄』のタッグによる他選手の掃討。あの光景も然ることながら、その後の一騎打ちも印象に深いですね」

「本日最後にあります予選Cはどうですか？」

「やはり『楽園』ですね。まず間違いなく今年も多彩な光景を演出してくれるのではないでしょうか？『楽園』も優勝経験がありますからね。選手次第で今年も期待できるのではないでしょうか？」

「ありがとうございます。さて・・・・・・もう暫く時間が掛かる模様ですので、皆さんもう暫くお付き合いください。それでは明日からの予選D，E，Fについてもディストさんの意見を聞いていきましょう。明日の初戦である予選Dですが、ここはどう見ますか？」

「少しお待ちください。明日の、予選は、あぁ、これですね。予選、D。そうですね、ここは、難しいですね。いや面白いというのが正しいかもしれませんね。『要塞』と『双璧』、それに『猛虎』の顔ぶれですね。これは予想が付きません。今回の光国祭の予選では一番の見所はここでしょうね。『要塞』による威厳のある建造物による広範囲防御、『猛虎』による性急な程の攻勢、そして『最強都市』

の『双璧』。これはもう神のみぞ知るという感じでしょう」

「やはり予想は難しいですか。私としては『双璧』がと考えて居たのですが、皆様はどうでしょうか。続きまして・・・・・・とどうやら時間のようです。この続きはまた明日、予選開始前に時間がありましたら続けたいと思います」

眼を覚ますと、僕は一つ伸びをしてから体を起こした。窓が無い為に周囲はやや薄暗い、という感じがして、今が何時なのかという感覚が掴めなかった。其の性なのかはわからないけど、頭がシャッキリしてくれない。

シパシパとする眼を擦り、キョロキョロと視線を彷徨わせると、ベッドサイドにある水差しが目に付いた。手を触れてみるとヒンヤリと心地よく、其れにつられるかのように喉の渇きを覚えた。グラスに移した水を一息に飲み干し、さてこれからどうしようかと考える。やることといってもこの部屋には何も無いし、風呂も昨晩入ったばかり。

と、そこで空腹になったらどうするんだろう？いう考えが浮かんだ。キョロキョロと隈なく見回してみたところで、食べ物の類は愚か、何処かへの連絡をするような物も無い。

「となると・・・・・・食堂とかあるのか？」

そう考え、少し探検に出てみようと、少しだけ興奮気味に立ち上がると僕はドアを開けるべく歩き出す。

ドアを開けると薄暗い部屋に眼が慣れていたため、行き成り差し込まれた荷の光が眩し過ぎて眼を細める。

「やぁ、おはよう。よく眠れたかい？」

廊下に出た所で聞いた其の言葉に、声の出所に向け視線を移す。あいかわらず右手に無駄に豪華で金色の小槌を持ったその人物は、顔中に疲労感を濃厚に佇ませ、それでも何時もと同じ抑揚で僕に挨拶をしてくれていた。

「おはようございます。何か凄く疲れてますね？」

「ん？あぁ、そう見えるか？いや、そうだろうな。どうにも裏仕事というか、準備することが多くてな。今日から予選が始まるのだが、それに係わる諸々が私の役割だから、どうにもな。それで、君はどうしたんだい？こんな早朝から？」

その言葉に僕は探検を、という言葉を言いかけ、それを留めた。きっとそんな事言えば目の前の人物の顔に皺を一つ増やすことになるだろう。要らぬ気苦労を増やすのは良くないよね。ほんとご苦労様です。うーむ、そうなると、どう答えよう？

「そうですね・・・・・・あ、そういえばここって食事とかどうなるんですか？」

「あぁ、そうだな。部屋に運ぶことも出来るし、一応あっちの方に行けば食堂もある。料理の内容も数は多くは無いが、一応そちらの世界のものもあるよ。家のメイドもそこにいるから、解らないこと等も色々教えてくれるだろう。ただ、この時間だとまだ準備は出来ていないだろうが・・・・・・軽く作れるものなら頼めば作って貰

えるかもしれんな」

少し思案顔で考えてはそれをすぐ言葉にしている、というように何処か視点を固定したままに言葉を続けていた。それに相槌を軽くはさみつつ聞いていた僕。・・・・・・家のメイド？というのは、あぁ、いるんですね、その人。どんな人なんだろう？ちょっと興味が出てきた。

「と、そろそろ行かないと不味い。話が途中だが、私はこの辺で失礼させて貰うよ」

そう言い残し、その人が右手を挙げた時、右手のあれが一瞬光った時其の姿は既に消えていた。

無理せずに頑張って下さい。という言葉は虚空に吸い込まれ、さて、それではと僕は気分を入れ替える。折角食堂の位置を聞いたのだし、部屋に戻ってもすることも無い。それなら一度見てこようか、と僕は先ほど聞いた方向へ歩き始めた。

食堂、という感じのそこにはドア等ついておらず、開放的な空間となっていた。広さとしても、最初に居た教室三つ分位の広間で、窓と思われる開口部が壁には並び、横に長いテーブルが横２列、縦に１５列程等間隔に並べられていた。

（高校の学食みたいだな）

僕はそう考えながら、其の景色を眺めていると、其の静かな空間

において、既に先客がいるのが目に付いた。どっしりと椅子に腰を降ろし、手には湯気を上げる丼を持って何かを啜っていた。其の光景に僕は何故か熊を連想していた。え？いや見た目的にというか、雰囲気的にというか。

そんな光景を見ていた為か、不意に僕のお腹もその意思を主張しはじめた。その音はやはりこんな広い空間に一人しかいない状況だとなんとも場違いな異音としか聞こえず、なんだかとっても恥ずかしい、遣る瀬無い気持ちにさせてくれる。

まあ、当然というか其の音に先客のお方がぴたりと動きを止めると、此方を振り向く。そんな動きの固まったままに体を捻る様にこちらを向けた相手は、右手に箸を、左手には丼を、口には蕎麦を突っ込んだまま、なんとも間抜けな光景を見せてくれた。僕と眼が合うと、その箸の間に見える、口まで続いていた蕎麦がゆっくりと上昇を始め、踊るように揺れながら次第に姿を消し始める。ゴクリ、という喉を通りすぎる音と共に、其の人物は何故か笑顔に変わると、こっちに手招きを始めた。

「よう、お前も腹が減ったって口か？」

「まぁ、部屋にいてもやることが無いので少し探検でもと思いまして。そしたら部屋を出た所であの魔法使いの人に会いましてね。こっちに食堂が在ると聞いたので、少し見ておこうかなと」

「なんだ堅苦しい喋り方だな。どうせここで会うだけだし、目上だからとか気にスンナよ。どうしてもってんなら別にいいけど、俺と話すのにそんな気にしなくていいぞ？」

そんな事を言いながらも、残り僅かとなった蕎麦を箸で掻っ攫うと、一息にそれを啜り上げた。豪快だなぁ、と思いつつもやはりそんな光景を見ていると空きっ腹が意識させられる。そんな僕の物欲

しそうな視線に気がついたのか、その熊の様な男は立ち上がると「付いて来い」と言いながら、丼片手に歩き出した。

「姉ちゃん！おーい！もう一杯もらえっか！あと、俺のもお代わり頼む！」

厨房へと繋がっているらしいカウンターに身を乗り出しながらそう叫んでいるのを見て、この人結構面倒見のいい人だなぁ、とそんな事を考えていた。そんなことを考えていると、厨房の方からさきほど姉ちゃんと呼ばれた女性が出てきた。

見た感じで僕よりはやや年齢が上と思われる黒髪黒目の女性。雰囲気はどこか野生的というか、うんこれは女性には失礼な気もする。なんというかお祭り大好き的な元気溢れる勝気な女性という感じかな。

その人は熊みたいな男の人に困ったような笑顔を浮かべた後、僕に気が付いたようで、軽く会釈をすると、ニッと笑って「了解！」と元気な声を上げるとまた厨房の方へと消えていった。

「綺麗な姉ちゃんだろ？性格もさっぱりしてそうだし。どうだ？惚れたか？」

となにやら楽しそうな声で、その熊のような男が僕をからかうようにおどけて声をかけて来た。

「あぁ、彼女はあれですよ？あの魔法使いの人のこれですよ？」

と、いささか古臭いような気もするが、僕は熊みたいな男に右手の握り拳を見せる。その握り拳に小指をぴん、と一本立てて。

なんでぇ、と面白くなさそうにつぶやいているところを見ると、まさかこの熊さん狙ってたのかしら？とそんなことを考えていた間

に其の女性が再び此方に姿を現してくる。両手に持った丼をカウンターに乗せると「へい、おまちー」となんとも聞いていて気分のいい声を上げた。

「ありがとうございます。あぁ、少し聞きたいことがあるんですけど」

と、僕の言葉に「ん？」と軽く声を上げて視線を寄越すと

「とりあえず食べてからにしなさいな。食べ終わったらまた声掛けてくれればすぐ顔出すから。早く食べないと蕎麦冷めちゃうよ？」

と言ってまた厨房の方へ消えていった。あぁ、仕込みとか色々あるんだろうな、うん。

蕎麦は冷める前に食べたほうが美味しいよね？と小さく頷いてからカウンターの丼に手を掛けて先ほどこの熊さんが食べていた机まで二人で歩いていく。あれだね、もう熊さんでいいよね。

「そういやお前、何処の奴なんだ？」

ずるずると僕が蕎麦を啜っていると、熊さんが聞いてきた。何処の奴、というのはまぁ都道府県で何処の、ということだろう。はふはふと口の中の蕎麦をゆっくり胃に押しやると、ふぅと一息付いた所で視線を上げる。

「僕は青森ですね。熊さんは？」

熊さん？と一瞬怪訝な表情を浮かべているのを見て、あっと思いやっちゃった？的な表情で相手を伺うと何故か獰猛な笑みを浮かべて肩をぽんぽん叩かれた。

「面白い奴だな。俺は北海道だ。今日の予選Ｂに出ることになってっけど、そっちは？」

「あ、僕もＢですよ。一緒ですね」

「お、そうなのか？面白れぇな。ん？てことは・・・・・・」

という言葉の後は何か考えるように腕を組んでいた。なんだろな？と思いながらも未だ半分ほどしか手を付けていない蕎麦に箸を落とす。あぁ、うまいなぁ。ずるずる。

「なぁ、いいこと考えたんだけどよ？最初二人で手を組まねぇか？」

最後の一啜り、と丼に残った数本をちゅるり、と飲み込んだタイミングで、熊さんの声が聞こえた。何だっけ？手を組む？と視線を熊さんに移すと、ガキ大将、という印象の熊さんがこちらを見て笑っていた。

「・・・・・・それは、残り二人になるまで、互いに攻撃しあわないってこと？」

「おう！それだけで結構変わるだろ？こっちからは攻撃がこない、あっちから先にってなもんだ。俺は最初優勝とかどーでもよかったんだがな、なんつーか、あれだ。罰則？あれが、どうにもな・・・・・・」

最初の勢いもどこへやら、歯切れ悪く言葉を濁し始めている熊さんが、少しおかしかったけど、まぁ確かに悪い話じゃないな。ここは乗っておくのも面白い。ちょうど二人しかいないんだし、話を進

めるにしても時間を掛けないほうがいいかもしれない。

「乗りましょう。僕はまあ優勝も罰則もそんな気にしてないけど、まぁ、意地というかプライドの為にも早々に散りたくないので」

僕の言葉にぱっと笑顔になった熊さんと握手をしながら、どうしようかと相談する。とはいえ効果の解からない魔法合戦である以上、あまり詳しくこうしようということができない。考えられる可能性として自分を中心に展開するというのもある。とりあえず最初は近くの奴を倒したら、挟み撃ちが無難かな？という感じで話を進めた。

それから幾らか時間が過ぎたころには疎らにではあるが数名がここに顔を出し始めていた。

次第に活気が溢れ始める食堂。それぞれ気の合う、話の合う、偶然にも隣に座った相手と、近隣の県の人と、と話し始める光景。

そういえば、と僕はカウンターに行くと、大きめな声で「お姉さーん」と叫んだ。それにひょっこりと顔を出したお姉さんに

「部屋にいてもやることないんですけど、あの、なんて言えばいいんだろ？過去の試合のホログラフ？みたいな映像あるじゃないですか。あれってみれます？」

「あぁ、あれ？私じゃ無理なんだよね。うーん、確かに待ってる時間て暇だよね。ちょっとあいつの首根っこ掴んでここに持ってくるよ」

そう言いつつエプロンを外し始める彼女に、あぁ、やっぱりいいですごめんなさい、自分我が侭言いましたと、おろおろとしながら言葉を投げかけては見たものの

「あいつのことは気を使わなくていいから。三日位なら馬見たく働

くし」

と、物騒な言葉を残して消えた。あぁ、ごめんなさい。と次の瞬間、本当に首根っこを掴まれてグッタリしている物体を手に「持ってきたよ」と爽やかな笑顔で僕に声を掛けてくれた。あぁ、その物体からの刺すような視線が痛いです。胃に穴が開きそうなくらいに。

あいかわらずがやがやとしたこの食堂。どうもココに人が集まってからは誰一人自分の個室に戻るものがいなかった。トイレや風呂の場所を教えてから数名ふらりと消えたと思うと、其の後は此処に戻ってきている。まぁ、部屋には何もないしねぇ。そうしてわいわいと時間を潰していると

「さて、これより予選Ａの選手にはコロシアムの方へ移動して貰う。あちらにも色々準備やら何やらがあるということなので、一人づつ、二分置きに移動して貰うことなる。予選Ａの選手はこちらに集まって欲しい」

カウンターの前に行き成り現れた魔法使いの男の人は、現れるなり声を張り上げていた。其の声に八人程立ち上がると進み出る。それを頷き一つで迎えると

「まず一人目。東京都」

と言うと、その八人の集まりから一人姿を消す。それからチラリを左手に持つ銀板に視線を向け、暫くするとまた声を上げる。それを繰り返し、最後の一人が消えた後、その人物も消えていた。いよいよはじまるのか、と急に込上げる不安に戸惑いながらも、自分は

大丈夫。それよりも楽しむんだ。と暗示のようにつぶやく。
ふいに、つんつん、と肩を叩かれ、視線を向けると厨房から出てきたばかり、という格好のままのお姉さんが壁の一面を指差した。
「あそこに予選の中継映像見れるようにしとけって言っておいたから。本当は会場で見たいだろうけど、あれで我慢してね」
と言いながら手をひらひら振るとまた厨房に消えていった。視線の先には正に其の通りにやや鮮明さには欠けるが、それでも見れないよりはましだろう。
映像の先では等間隔に佇む八人。これが終わったら次はあそこに立つのは僕なわけだ。

『さあ、予選Aの選手が出揃いました。いよいよ始まります。第五回光国祭!!その初戦はどの様な結果に終わるのでしょうか!間も無くそのゴングが鳴らされます!!』

――――　カァーーーーン

6（後書き）

書き出しを迷っていたらこうなっちゃいました・・・・・。始まってませんよね、予選。でも出来れば石は投げないでください。誤字、脱字のご指摘、感想、意見等貰えましたら唄って踊って喜びます。

7

物音一つしない、静まり返った空間。今現在３９名の人間がいるこの食堂は、先ほどまでの喧騒が嘘の様に静まり返り、声の一つも、物音の一つも発することなくただただ静寂を漂わせている。

その中にあって唯一の変化は壁一面に映し出される光景。其処に映し出されているのは自分達と似た風体の八人。

中央に躍り出ている一人を囲むように動き出した五人の人影が、また動き出そうとしたところで静寂が破られる。ゴクリ、と何かを飲み込むような音に、その後の光景を既に予想していたかのような、そして正に其の通りの結果を見ても、誰一人としてその表情を変えることはなかった。

「・・・・・・ありえない、だろ。これは」

そんな言葉が隣から聞こえたと思い、視線をチラリと移せば、あの青年が何時も間にか隣に居た。どうやら僕はそんな事にも気がつかないほどに画面に見入っていたのだろう。いや、僕だけではない。ここにいる全員が似た状態だろう。ひょっとすると、この画面の中の一人を除いて・・・・・・。

ゴングの鐘の音を戸惑いと同時に其れを合図と捉えて動き出そうとする者が多いなかで、一人だけは待っていましたとばかりに即時行動を開始していた。その一言を持って。

「都庁」

其の言葉が紡がれると同時に其の人物の周囲に薄い緑色の膜のような物が纏わりはじめ、其れの発行と同時に変化が起きた。

足元に直径十メートルほどの魔方陣らしきものが展開し、そこかの立ち上るように線状の発光が迸ると共に、半透明の『何か』が徐々に浮き上がるように姿を現し始める。熱を伴わないような無骨な灰色をした、まるで高層ビルの様な形容のそれが、未だとどまることを知らずグングンと天を目指してその様相を顕にする。其の高さも、人間の身長よりも優に五倍以上はあるだろう。その動きが収まると、其の中心に居た人物は、何かを納得したような表情に変えた後

「変形！」

と叫ぶと同時に右手を握る。と同時に其処に呼び出されたそれが、そう動くことが自然であるかのようにその形容を変化させ始める。まるでプラモデルにあるようなロボットの変形と同じように、離れては折り畳まれ、内に収納されてあるパーツが伸びることで接合するように、精密な動作でパズルのごとく汲み上げられて行く。其の動作が終息に向けるにつれ、それを行った人物の顔には満面の笑みが浮かぶ。

そして、更に言葉を重ねるように其の人物は声を張り上げる。

「《東京》タワー！」

其の声に反応して中空に一つ魔方陣が踊る。その中心から何かが引き出されるかのようにズズズッ、という音がしそうな速度で赤い物が顔を表す。

円柱のようなそれを、変形の終わったであろう先程のロボットにしかみえない元『都庁』は、右腕を伸ばすと其れを掴み、一息に引

き抜くように腕を後ろに引き抜く。ズルリ、と取り出された其れは、形状から見ても槍にしか見えない。それもそのロボットが持つに相応しい大きさの槍、という大きさで。それが引き抜き終わったと同時に、其のロボットは何故か『決めポーズ』をしていた。

「成程、こいつの動きは俺に連動するのか。こいつはいいな。よろしい、ならば」

と其の人物は周囲を見る。唖然として事態を見ているしか出来ずにいた一人を見つけ、ニヤリと笑みを浮かべながらに其方に体の向きを変えると左足を踏み出し右腕を突き出すように前で振る。

「ぎゃふん」

という声と共にそこに居た人物が座り込み始める。その結果に満足そうに頷くと、次はと視線を移す。キョロリと視線を移した相手は、其の人物と視線がぶつかったと同時に硬直した。其の様子は宛ら蛇に睨まれた蛙。しかし其の蛇は舌を出して威嚇することはせず、それ以上の恐怖を体現しながら笑みを浮かべているだけ。そしてまた右腕が振られると同時に「ぎゃふん」という声が上がる。

それは誰が見たところで圧倒的な光景だった。

未だ開始して数秒。まだ一分すら経過していない。であるのにこれだけの結果を築き上げてのけたのだ。

そして、其の人物は顔に貼り付けた笑みを絶やさぬままに次の獲物を求める狩人として、再び行動を再開し始めていた。

「瞬殺！これぞ『最強都市』！！ご覧ください！その名の通り圧倒的な結果となりました！このまま一方的な展開となるのでしょうか！？」

「素晴らしいですね。開始と同時の発動。そして見てください。今。二人目の青年は土下座しながらぎゃふんと言っています。心躍る光景です。え？そんな感想は聞いてない？

しかし今年の『最強都市』の選手ですが、これまでの選手よりも判断と行動の早さが違いますね」

「これはひょっとすると『最強都市』一人で他の選手全員を相手取る、という試合になりそうですが、ディストさんの考えはどうですか？」

「そうなるでしょうね。他の選手が勝ちあがるには手を組んででもまず『最強都市』を落としたいところでしょう。現在見られるあれは召還によるゴーレムでしょうか。それとゴーレムが手にする武装も召還でしょう。複合での魔法行使を容易くこなしている辺り、底が見えません」

「おぉっと！『最強都市』が動きました！追い詰められた相手は未だ動きが見られません！これは決まるか！」

「・・・・・・いえ、これは状況が変わりそうですね」

『鷲宮神社！』

『西郷四郎！』

「アァァァアアアっと！ここで動きがありました！」

「一人が槍を、一人がゴーレムを。攻撃動作に入り標的を固定した一瞬の硬直、正にそこを突くように狙いすました結果でしたね。しかし・・・・・・」

「そうです！！それでも動くのが早かったのは『最強都市』！！これで単独撃破三名！！そしてご覧ください！！　構図から見ても『最強都市』対残り四選手という形でしょう！
中央に躍り出ている状態の『最強都市』。其れを囲い込むように動く残りの四名の選手。こうなるとこの先は今までのようには行かないのではないでしょうか？」

「今ので空気が変わりましたね。どの選手も目つきが変わっています。その点で見ても今の二人の行動は結果的に相殺でしかないでしょうが十分な戦果でしょう。楽しみですね」

「圧倒的・・・・・・だな、これは」

隣から聞こえる声に、僕は声も出せずに頷くしか出来なかった。

最初こそ周囲の反応が遅れている隙を突いただけであろう。だが、その後に続いた光景は、状況こそ違えど結果は何も変わっていない。唯一人による蹂躙。

考え方がまるで違う。僕のような地方だと有名だと思えるものが少ない。それこそ小出しに、状況を見て、先を考えて選ぶべき言葉を、其れこそ湯水の様に次々と紡いで行く。そして其の一つ一つが膨大な魔方陣に変わり、そして周囲を飲み込むように脅威を振りまく。

もはや反撃すらできていない。好くて相殺。そう、好くて起こせる結果がそれだけなのだ。

減殺しかできない相手が、次の一手を打つ前にその魔法に飲み込まれ、一人、また一人と戦線離脱を始める。そうして、今最後の一人が相殺出来ずに、迫り来る魔法に

『圧勝！！圧倒！！圧巻！！これぞ『最強都市』！！これこそが『最強都市』という言葉を体現した様な光景！！其の中でも今年は過去に例を見ない程異例の強さ！！疲れなど微塵も感じさせない余裕の佇まい。観衆の熱狂もこの試合の凄さを物語っているかのような盛況さ。今年の光国祭は例年にない程盛り上がるのではないでしょうか！！

それでは解説のディストさん。今回の試合ですが――――』

勝てる、という考えが僕にはどうしても浮かばなかった。それも仕方ないの一言で片付けるのもどうか？とは思われるかもしれないけど、実際これだけの差を見せ付けられた後だと誰だってそう思うんじゃないか？と思う。

「いやぁ、なんつーか。デタラメだな。単独撃破？改めて東京のチートっぷりが浮きだったな」

「それだけじゃないのが、またね。解説の人も言ってたけど、判断が早い。
確かに東京は知名度高い。でもだからといって無限じゃない。有限である以上短期決戦が勝敗を握るんだろうけど、正に其の通りに事を運んでたし。
囲まれたから、というより、最も警戒されるってのは言わなくてもね。其の点でみてもあの行動の早さは」

「だな。出し惜しみなく怒涛の連呼。あれじゃぁ、な」

「出来れば予選の内にもう少し手札を減らしてくれてればって思うけど、あれ見ちゃうとどうにもならなかった様な気がする」

渋いとも苦いとも言えるような表情で、溜息しか出ない口を無理やり開いて、という感じで話し始める。
考えてもしょうがない。次は僕の出番なんだ。この先考えるのは予選で勝ち残れたらにしよう。
意識せずとも零れそうになる溜息を苦笑に変えて、無理やりにでも思考を切り替える。

先程の試合を見て少し考える。魔法の発動。
誰しも最初の時こそやや戸惑いながら、という感じであったが、その言葉を言い終えるや何か納得したような表情に変わっていたこと。使う前は結果がわからずとも、それが魔法となる時には其の効果を把握しているように見えた。
僕の予想としては、発動と同時に知識の取得もしているんじゃないか？という感じ。
それともうひとつ。
地名。これだけでは魔法が発動しなかった。が、変化がないわけ

でもない。見た感じではブースターのような気がする。
その土地の特産物、という感じの言葉にすると、明らかに効果が違っていた。そして其の方が『聞く相手』も良く把握できていたような印象があった。

視界に映る映像には、すでに先程まで居た八人の姿が消えていた。
残されたのは、アナウンサーの顔を赤くして叫ぶマシンガンの様な言葉と、其れとは対照的な空気を纏った解説の男性。そして半狂乱という感じのその他大勢。

「思いのほか早く終わってしまったが、まぁ見ていただろう。君達がこれから行う物がどういうものかというのは、今見たものが全てだ。
これが『光国祭』。この国一番の宴だな。流石に今のは一方的な結果だったが・・・・・・。
さて、これより予選Bの試合に移る。選手の八名は此方に来てくれ」

またもや何時の間にか現れていたその人物の声に、僕はいよいよ始まるんだな、と覚悟を決める。流石にあんなの見た後だとやる気も、ねぇ。優勝は無理だよな。

「負けんなよ～」

という何時の間にか馴染んでしまったその声による投げやりな声援を背中に受けながら、僕はゆっくりと進み始める。歩く途中で誰かが横に並んできたが、其の体格から誰であるのか直ぐに悟ると、其の相手の口元にある笑みを見て、僕も同じような笑みを返す。

「揃ったな。それではこれより予選Ｂの選手にはコロシアムに移動して貰う。先程も言ったが繰り返し説明する。一人づつ、二分置きに移動して貰う」

一様に頷く僕らに、軽く答えるように頷いた相手は、暫く目を瞑ったかと思うと、厳かなな声音で次の宣言をした。

「まず一人目。青森県」

7（後書き）

予選開始。

放送禁止用語とか、どの辺まで大丈夫なんだろうか？と考えると手が止まります。ネズミの国とか、ネズミの国とか。社名とかもまずいのかな？

誤字脱字、指摘感想、意見や批判、ありましたらよろしくお願いします。

8

改めて見回してみると、この闘技場はかなり広い。
僕達が居る場所は観客席より一段低く、そこの広さだけでも小学校の校庭くらいには広いと思う。
そこから同心円状に一段、また一段と上へ上るように観客席が連なり、その面積も含めるとしたらそれこそ何千平方メートルという感じ。
場違いな考えだな。切り替え切り替え。
まず見るべきは僕以外の八人の性別と、年齢かな。

「予選Ｂの選手が揃いました。いよいよ始まるわけですが、やはり先ほどの試合の衝撃が残っているのでしょう、観客席の熱気も恐ろしいまでに上昇しているようです。もう間も無く開始されますので暫くお待ちください」

其の声と同時に、最後の一人が現れた。最後は、うーん、高齢な人が来たなぁ。ともかくこれで八人か。
もうすぐ成人式な僕、見た目的には三十代な熊さん、中学生位の少年、中学か高校かって感じの少女、大学生っぽい青年が二人、三十路はいってそうな女性、最後に壮年という感じの男性。
ということは、若い世代が知っていそうな、興味を持ちそうな物で考えるのがいいのかな？

「これで八人。揃ったところで少し説明をしてから予選を開始する。君達の魔法が観客席に影響を及ぼさないように結界が張られているが、これは絶対の強度を誇る、という程のものでもない。君達が手を組み一点集中してとなると流石に防ぎきることはできないだろう」

僕達八人が隣人との三十メートル間隔で円状に立つ中心に立つ魔法使いの男性が口を開く。その右側奥には、熊さんの姿が見える。

「だからといって試そうとはしないで欲しい。そうなると私は君達を国敵と見做さないとならなくなるからな。君達の魔法は他人の命を如何こうはできないのだが、私の魔法はそれとは違うのだと覚えておいてくれ」

つまりは、そんなことをしたら命の補償はしませんよ、ってことね。まぁ、誰もそんなことしないだろうけど。過去にそんなことがあったのかな？

ふと視界に映る景色に動きがあるのが見えた。ピントが合ってなかったその位置に視線を集中する。

熊さんが、左腕を軽く動かし、其の手を握ると人差し指を一本だけ立てた。

『まず、最初に何処を狙うか決めよう。隣りあわせで動くにしろ、挟み撃ちを狙うにしろ、背中を見せるのはまずいだろう』

『そうですね。じゃぁ、合図でも決めましょうか。横一列に並ぶのか、縦一列に並ぶのか。あのコロシアムは円形だったから円状に並ぶかな？』

『公平にって考えりゃ円状ってのが妥当じゃねぇか？縦一列だと最後尾が一番有利だろ？横だとしても真ん中に居るやつはどうしても不利じゃねぇか？』

自分の分の蕎麦を食べ終えたところで本腰を入れて、という感じに秘密会議が始まった。作戦会議と呼びたいところだけど、自分達に何ができるのかわからない以上、今から決めておけることは少ない上に、其れすらも予想してからの、こうじゃないかなということに対しての取り決め。

男二人で息を潜め、小心者が都会の喧騒を歩くが如く、周囲をチラリチラリと確認しながら行われる其れは、もはや会議にとすら呼べないかもしれないけれど。

『とりあえずは自分に来るやつの対処は各自、余裕があるなら狙い撃ちって感じか？』

『くらいしかないでしょうね。それを如何相手に伝えるかですね。あいつを狙おうって思っても、伝える手段がなきゃ出来ないし』

『そうだな、指差すとかすりゃ警戒されるし、手を組んでるってのがすぐバレルだろうな。偶然を装いつつってのが一番だろうが・・・・・・なんかあるか？』

『うーん。んー、とりあえず。あぁ、こうしますか。横並びの状態か円状に並んだ場合を前提でってことになるけど、まぁ高確率でその立ち位置だろうから使えると思う。

自分から見て左隣の人を狙う場合は左手を握って、こう指を一本立てる。逆に右側に一人目だったら右手で。それを相手が確認したら、相手も自分から見て同じようにする。それで相手に意思確認が伝わったこともわかるし、自分の標的の再確認もできる。もし自分が狙われてる、すぐ対処できないって時は返事は無し。普通に自分で考えての行動ってことにする。これでいけそうじゃない？』

『・・・・・・今考えたのか？それ？』

キョトンという感じが似合わない熊さん。ポカーンとした、何処か間の抜けた表情で此方を見たままボソリとつぶやかれた言葉に、そうだよ、と答えるも、その反応は変わらない。そんな驚くことでも無い気がするけど・・・・・でも反対する気配はないし、別案を考える必要はない、かな？

『いいじゃねぇか。それでいこうぜ』

ニヤリと獰猛な笑みを浮かべた熊さんに、やっぱりこの人はこんな顔がよく似合うなぁと思った。それに頷くことで返事を返し、チラリと視線を走らせると此方に誰かが歩いてきているのが見えた。

その方向を見たまま動かなくなった僕を見て、熊さんは「ここまでだな」と丼を持って席を立ち上がった。時間的にも最早早朝というには遅く、夏休みだったらラジオ体操に行った帰りの、子供たちのはしゃぐ声が聞こえる時間。

『予選、最後まで残るのは俺達だ。いいな、相棒』

歩き出す背中。そこから聞こえる声に僕は、声を掛けることはせず心の中で返事を返す。

了解、相棒。

「――――には注意することだ。それと、敗者の処置だが、試合が終わるまではここから移動できない。これは知名度の影響と考えて貰っていい。試合が終わるまで、その八人にとっての知名度であるという状況の維持の為だ。

本当は一対一の状況ではその当事者のみ残し、敗者には退場して貰ったほうがいいのだが、そうなると派手さが減衰する。此方の都合でそうなっている訳で恐縮だが。その場に放置するということはないから、その点は安心して貰ってもいい。

以上で説明を終える。私が消えたあと間も無くゴングが鳴るだろう」

健闘を期待する、という言葉で締めると、その言葉通りにその姿が消える。

入れ替わるように聞こえてくるアナウンサーの大音声を聞き流しながら、僕は右隣に居る人物を確認する。

大学生という感じの青年。僕より上に見えるけど、それほど大差ないだろう。きっと二十代前半。

ゆっくりと右手を握り、人差し指を立てる。僕と熊さんの間に居るのはこの人だけ。開始と同時に攻略できれば、かなり状況を好転できる。右側からの攻撃は気にせず、左と前方だけの対処で良くなる。

「開始の準備が終わった模様です。皆様お待たせしました！間も無く予選Ｂの試合が開始されます！

この試合の勝者は一体誰になるのか！今！ゴングが鳴らされます！！」

――――　カァーーーーン

「《津軽》海峡」
「襟裳岬」

先ずは様子見。とはいえある程度は知名度のありそうな物で。
ゴングと同時に叫ぶ声は、想像道理に重なるように響く。
言葉を紡ぐと同時に奇妙な感覚が僕の中に浮かび上がる。
僕が口にした言葉に対してのイメージが浮かんできた後、それに溶け込むように異物が押し寄せては形を変えていく。その変化が終わると、今度はそれをどの様に扱うかという感じに。
僕が口にした『津軽海峡』という言葉に秘められる力は五人分らしい。
そしてその効果。雪の吹き荒れる凍てつく海に、荒れ狂うように暴れる波が押し寄せるが如く。対象を一人に選ぶ場合は効果が薄れるようだけど、それでも今はそれでいい。一人で対処しなくてもいいのだから。

対象を一人に、と念じるように頭に思い描き、次の瞬間には右隣へ向けその力を具現化させる。
目の前に現れる魔方陣に右手を触れると、眼を開けるのも辛い程の吹雪が視界を埋める。それに遅れてザブン、という音と共に現れたのが高さにして3メートルは在るだろう水の壁。
弧を描くように聳え立つその壁は、まるで進むべき方向にある物を飲み込むが如く大きく口を開けた獰猛な獣を思わせる動きで、僕が指定した人物へ向けて迫り寄る。
「比叡山延りゃうわっ――――ぎゃふん」
それに対応するべく言葉を紡ぎ始めた彼を、強烈な風が背後から襲う。

僕が作り出した荒波へ向けて迫る風は、彼の体を持ち上げるほどに強いようで、反撃として対処するべく行動を起こした彼に、その言葉を紡ぎ終える時間すら与えてはくれず、無慈悲な牙を背後から突き立てていた。
その風は僕の荒波へと犠牲者を運び、そのまま荒波にぶつかると、共食いするかのごとくせめぎあった後には、何もなかったかのごとく霧散する。

幸先好調。熊さんの方へ視線を移すと、楽しそうに笑いながら此方に小さく頷いてくれた。
予定通りにまず一人。これで此方側の脅威は消えた。視線を移して状況を確認する。さぁ、残りは五人。その後最後に熊さんとのタイマン。それまで僕はどう動こうか？

「開始のゴングと同時に動いたのは『予選の英雄』と『北の番人』！まるで互いを牽制するかのごとく、瞬時に睨み合った二人のその行動は、全く同タイミングでの発動となりました！
ディストさん。今のをご覧になっての感想はありますか？」

「流石というべきでしょうか。先の試合での『最強都市』もそうですが、今年の開始早々展開が素晴らしいですね。しかし、残念というべきか、その間に立った彼は不幸にもその被害に会った訳ですが」

「この光景こそが開始の合図とでも言うかのように、選手達が動き始めましたね。その二人ですが、今のは挨拶だ、とでも言うんでしょうか。標的を変えるように動き始めた模様です」

「いい判断だと思います。両者共初撃は油断があって、食らってく

れたら儲け物という感じでの攻防でしょう。このまま延々周囲を警戒しつつ互いに消耗を繰り返すには、相手が悪いと悟りうる光景でしたから」

「さて、試合ですが、何やら三人で睨み合っているのが見られます」

「残り七名。『予選の英雄』は左にいる少女と対峙し、『北の番人』も右隣の少年と、その奥では三人が相手の隙を伺いつつという感じに見えますね」

ジリ、と小さく聞こえた音に、僕は左へと体ごと振り向く。そこに居たのは中学生か高校生と見える少女。その少女も、こちらを警戒しつつ周囲を確認している。

奥に見える三人は、壮年の男性、大学生らしき青年、三十路くらいの女性。こちらや熊さんの方へは軽く警戒しるにとどめ、その三人での探りあいをしているという感じに見える。

それが少女にもわかったのか、それなら警戒すべきは逆側の、という感じで此方を強く警戒しているのだろう。さて、彼女は何県の人物なのだろうか。そう考えている間に場は動いた。

「毛利元就――ん、あぁ成程。三本の矢」

その声は少し渋みの感じられる厳格な音色。外見を裏切らない老成された響きに、即座に反応したのは二人同時だった。

「なら僕は西郷隆盛」

「っ！水戸黄門！」

それに少し遅れて熊さんの方からも声が聞こえた。
「《魚沼》産コシヒカリ」
「ほう！なら俺は《十勝》のじゃがいも」
その声にそちらを確認しようとした僕は、被せるように呟く声を捕らえた。

「座敷童子」

少女の足元に広がる畳敷きの座敷。その座敷は八畳まで広がった後、黒ずんだ柱が四隅に立ち上る。その後弓のように反った梁が伸びると、すぅ、っと小柄な少女が姿を現す。
これの効果は何だ？と僕が考えていたとき、壮年の男性の手元に矢が三本現れる。それ内二本が対峙している青年と女性へと向けられ、そして残りの一本は、僕の前にいる少女に向けられ。
其れを確認した時には、その矢は既に加速を開始していた。
その矢の一つは、西郷隆盛の放つ大砲を相殺し、その矢の一つは三つ葉葵の印籠を持つ水戸黄門を容赦なく貫き、その矢の一つは、その少女に届くことすらなく消え去っていた。

その予想以上の結果に、僕は驚愕し、戦慄した。

9

「・・・・・・今、黄門様、貫いたよな？」

「そうね、西郷隆盛も知名度は高いと思うけど、その攻撃も相殺したわね」

食堂に集まり、予選の映像を興味深く、あるいは熱心に観戦している。

その一角で、唖然とした表情を浮かべた青年と、やや眉を吊り上げ気味に難しい顔をした女性が言葉を交わしていた。

その会話の内容は、先程スクリーンに映し出された光景であり、今尚映り続けている和風作りの空間と、其処に佇む選手の少女と、其の隣にひっそりと侍る、日本人形のような身形の童女について。

「てことは、あの矢の威力は半端じゃないってことだよな？　何であそこだけ平然としていられるんだ？」

「うーん、距離で威力減衰、には見えなかったし、三本の矢ってことから、三本目、は無いわね」

「その毛利さんが妖怪とか其の手の物が苦手だったとか？」

「だったとしても、黄門様と相殺するような攻撃で無傷とかありえないんじゃない？どんだけ怖がりなのよってことになるわ」

「じゃあ、あれだ。ロリコンだった、とかどうよ？」

「・・・・・・あんたじゃ在るまいし・・・・・・」

「え！？　いやいや、俺はどう見ても正常だろ！いや、見た目だけじゃなく正常だろ？」

「・・・・・・」

「うわ、ビックリするほど無反応！」

映し出される映像には、三人の選手がその後も互いに牽制し、隙を突き、誘いながらに攻撃を繰り出している。そこから少し離れたところでは、未だそこだけは別空間の如く悠然とした光景が見られる。

少女の動向を確認し始めてから、少し気になる動作を僕は見つけた。相変わらず動かない僕よりも、向こうの三人を警戒するように、視線をあちらに向けつつ、時折此方を振り向く時、どうも少女は手首の辺りに視線を落としているように見えた。其の動作が三回目となる先ほどのこと、その視線が追いかけているものがチラリと見えたのだ。

そこに見えたのは、革のベルトと、そしてそれに繋がれた円形の――腕時計。

十中八九、あの魔法の効果は防御に特化している。それも其の強度は限りなく高いだろう。『水戸黄門』、『西郷隆盛』と、知名度から言っても高いそれらの言葉を、相殺しうるだけの威力を誇っていた『毛利元就の三本の矢』をまるで何も無かったかの如く受け流し、今現在変わることなくそこに在る。

絶対防御、と言っていいだろう。だが、あの少女は時間を気にしているように見える。ここから考えられる結果は一つだろう。
時間指定。
つまり、僕はあれの効果が切れるのを待てばいいだけ、とはいえるのだが・・・・・・。

（その間に他の魔法が使えるとしたら・・・・・・）

思考を切り替える。ある程度知名度が高く、それでいて自身の防御、または身体強化に向いていそうな物。と考えたところで、一つだけ思いついた物があった。が、はたしてコレは期待した効果を得ることができるのかどうか・・・・・・。

「ぎゃふん！」

という声に思考が拡散し、其の声に視線を移すと、熊さんの前に居る少年が座り込んでいた。ゆっくり、崩れいく感じに体が流れ、膝を抱えるように座り込むと、其の膝の上に顔を乗せ。
あぁ、背中が暗いよ、直視に堪えない。
視線を戻すと、少女も其の光景に顔を歪め、チラリと手首を、時間を確認したと思うと、其の表情に焦りを浮かべ、また三人の方へ視線を向けるた。其の光景を見た僕は、少女の考えが朧気ながらも理解した。

少女は、その効果時間の間に、あの三人が共倒れ、又は残っても一人になれば、と考えていたのだろう。安全圏で手札を晒すことなく。一人消え、注意がそちらに向いた隙に、もしくは二人消え、その直後の油断があろうタイミングで。
だが、僕は少女の焦りがそれだけでは無いのではないか？という

気がしていた。
では何が？と考えてみる。
知っている言葉で知名度が高いものが少ない？それとも争いを好まない、出来るだけ自分の手ではと考えている？もしかして男性恐怖症、、、はないか。他だと・・・・・・。
そんな僕の思考を、知ってか知らずか、少女の焦りは目に見えて大きくなっていく。時間もそうだろうが、熊さんが此方に向け歩き出したのも大きいだろう。
少女の焦る気持ちは、三人の決着を急かすようにその動向を見やる眼に、感情と共に現れている。早くしろ、と。何をしている、と。

足音が耳に届く。自信を漲らせ、悠然と歩くその姿には、やはり熊という言葉がしっくりくると思う。其の表情にもふてぶてしいまでの笑みを浮かべ、視線だけで僕に問いかけていた。次はどうする？　と。
あの三人の膠着は、拮抗が崩れるまで様子を見たい。となると、残りは少女になるわけだが、あの空間は現状手を出せないだろう。だが、少女の様子を見る限り、そろそろ・・・・・・？
何だ？あの視線は？僕と熊さんを交互に見其の距離が詰まるのに比例して険しくする理由は・・・・・・！

僕はゴクリ、と息を呑んだ。その時僕の顔に浮かんだ表情はどんなだっただろう。それを見た少女は苦々しく顔を歪め、時計を確認すると、向こうにいる三人への警戒もそこそこに、僕達二人へと体の向きを変える。
少女は、気づいていたのだ。僕と熊さんの関係に。あの焦りの正体はそこだったのだろう。
僕の意思が判ったかのように、熊さんも少女に意識を傾け、歩く速度を落としながら少女の方へと一歩進む。それに併せる様に、僕も歩き出す。少女を挟み込むように、熊さんの進行方向を確認しな

がら。

少女は悟ったのだろう。

手札を晒したくないと、座して待った結果が自身を追い詰めるだけになったということを。そして、追い討ちをかけるように、そこにあった空間は悲鳴を上げるように軋みだし、其の姿を崩し始めた時、その顔を隣に侍る童女と同じ、まるで人形のように青白いものへと変え始めている。

其の唇もやや色素を失ったように赤いものを紫色に変え、その唇がゆっくりと

「《遠野》の河童」

ゆっくり歩いていたはずの僕の足が、まるでもの凄い力で掴まれたかのように急に動かなくなっていた。その異常に足元を見ようとし、息を呑んだ。

沼が広がっていた。少女を中心に円状に伸びたやや緑掛かった色の直径三十メートルはありそうな程の。其の水面には蓮の葉や朽ちた倒木に苔の生えた様子も見られ、まるで秘境に踏み入ってしまったのではという心象が浮かび上がる。

僕や熊さんだけではなく、あの三人も其の範囲内にあるらしく、驚き、焦り、困惑し、現状を確認しようと周囲をうかがい始めている。其の中でいち早く落ち着きを取り戻し、動きを見せたのは壮年の男性。

「高杉晋作」

其の声と同時に現れた、長刀を手にした一人の武士。その切っ先

は目の前に居る未だ困惑から意識を切り替えられずに居た青年へ振り落とされる。

「ぎゃふん」

という声に、しまったとばかりに体の向きを変えようとした女性の方へ、足元の沼を何かが近づいて行くのが見えた。未だ姿を見せないその黒い影は、緩やかに女性の方へと移動すると、其の女性の足元まで進んだ後には徐々にその影の面積を増し始める。まるで何かが浮上しているように見えるそれが、水面を盛り上げるようにゆらりと波立たせると

「え？・・・ぎゃふん」

其の声と同時に、その女性もまたその場に座り込むべく、くず折れる。

これで、残りは僕を含めて四人。僕、熊さん、少女、壮年の男性。そして、未だにこの沼が消えていないということは、あの黒い影、河童がまだどこかに姿を隠し、そのうちの誰かを狙っているということだ。そして、壮年の男性の前に立つ武士。高杉晋作もまた、未だそのままに其処に在る。

僕は考える。この状況で狙うなら、僕か熊さん。そして、距離的に見て、次に狙うとしたら――

「坊主！」

そんな焦ったような熊さんの声に、やはり、と思いつつも僕は動揺していた。どう動くか考えようとしていた矢先、其の考えを終える前の出来事。そして思い浮かんだのは先ほど考えていたこと。

防御、もしくは身体強化。足が動かないとはいえ、これはあの少女の魔法の効果。それならば望みはあるか、と焦る気持ちを無理やり押さえつけるように少し考え、大丈夫だと自信を持つようにやや大きな声で

「太宰治、走れメロス」

「馬産地《日高》」

予想通り、とはいえない予想以上の速度で僕はその沼から抜け出すことが出来た。その時の僕が走る速度も驚嘆だったけれど、それに併走してきた馬上の熊さんの顔も驚嘆物だった。今までの自信がどこへ行ったのかと問いたいくなるような、なんとも情けない泣きそうに歪んだ表情。乗馬に何かトラウマでもあるのかもしれない。

でもまぁ、判断の早さは褒めるべきだろう。僕が離脱したとなると、次の標的は考えるまでもない。

これで沼からは脱出できた。そこに残るのは二人のみ。壮年の男性と、其の沼を作り出した少女。

「さて、お嬢さん。どうにもあの二人は高みの見物を決め込んだようだ。ということで、私とお相手願えるかな？」

やや余裕の伺えるその言葉遣いに、僕と熊さんは視線だけで意思を確認しあう。其の言葉通りにさせてもらうべきだ、と。

対して、少女はビクリ、と肩を震わせた後、此方の意志を確認するように一度視線を向け、僕らが既に沼から出ているのを確認すると、壮年の男性へと視線を戻す。

「河童、か。ふむ、試しにあの都都逸、を少し変えて詠ってみようか」

そう言い、壮年の男性は少しだけ深く息を吸うと、流れるように言葉を紡ぐ。

———三千世界の河童を殺し、主と添寝がしてみたい

と。

その顔はやや困ったように眉根に皺を刻み、気恥ずかしさを隠すように若干硬く口を引き結ぶと、其の声に呼応するように、男性の前に立っていた武士、高杉晋作が其の手に持つ長刀を一閃した。

其の長刀の軌道の後には、両断された河童の姿が霞み始めていた。

それに数瞬遅れて沼が消え、それを見た少女が悔しそうに手を握り締める。

端から見ても壮年の男性の優位は明らかだろう。やはり年相応の知識というのは伊達ではない、ということだ。僕の倍以上も生きているだろうその男性は、其の所作にさえ余裕がある。これは決まりかな？と僕は熊さんに視線を送る。

そこで僕は、吸い込まれるように右手に立てられた一本の指に釘付けになった。

今僕達の立ち居地は、僕の右に熊さん、左には少女、そして其の少女と向かい合うように立つ壮年の男性。

そして、熊さんから見て右側の一人目とは、壮年の男性。

僕はそれから視線を外し、対峙している二人に視線を戻す。そして、右手に指を二本立てた。

「《網走》監獄」

「《八甲田山》雪中行軍」

其の声に、壮年の男性は僕と熊さんの激突を予想してか、今までの余裕をそのままに、少女に対し次の一手を打つべく一言呟くと、此方に眼を向け、次の瞬間には身を強張らせた。
其の声に、少女はハッと息を呑み、対峙している壮年の男性への注意を忘れたかのように此方へ体を振り向かせ、背後から忍び寄る新たな一撃に膝を突いていた。

視界一面には氷点下を思わせる程の粉雪吹き荒れる白一色の空間。其処に入り込む異物は人の姿をした数個の影。その影は徐々に数を増して行くと同時に壮年の男性へと歩を進める。
壮年の男性は現状を認識した様に目の前に広がる光景へと瞳の焦点を定め、既に対処の遅れを悟り、諦めの表情を浮かべ――――そのまま白い暴虐の嵐に飲み込まれていった。

吹雪が収まり、視界が元の色彩を取り戻したコロシアムの広場。
その広い舞台に立つのは二人のみ。
其の二人にはある共通点が見られた。
顔に浮かぶ表情。期待に胸を膨らませる眼差し、楽しいという感情を表すように吊り上げられて行く口元。

「これで残ったのは二人だけだな、坊主」

「約束通り、ってとこですかね」

「じゃぁおっぱじめるか」

何の気負いも見て取れない言動と態度に、やや苦笑しながらも、ゆっくりと頷いてそれに応える。

そんな僕の表情に肩をすくめて心外だとでも言わんばかりに大げさな溜息を熊さんは零す。

対峙する彼我の距離は凡そ十メートル。その距離をはさんで立つ二人の男は、今までの連携の名残が在るかのように、このときもまた同時に口を開いて、その戦いの開幕を告げた。

10

目の前の地面に現れた魔方円が徐々にその直径を増し始め、其れに伴って零れるように立ち上る淡い光がその光輝も増しだした時、何かを形作るようにその光は規則性を持って移動を始め、その形が五芒星だと認識できたときには、それは城壁の如き高さに隆起しだし、其の全容を知ることができなくなった。

そしてその頂点の位置となる五箇所の先端部分には、砲門と見受けられる物騒な形状の櫓が現れ、その周囲には堀があり、そしてそこは水路と化し、より一層そこへの近接を困難にしようという意図が見受けられた。

そこまでを目視で確認し終え、対処を考えるべく思考に沈もうとした僕だったが、其の砲口が僕のいる位置へと動くのを捕らえた瞬間、脳内に響く警鐘に従って走り出すと同時に叫んでいた。

流石に、というしかないけど、やはり知名度で考えると北海道の熊さんに、泣きたくなるほど僕は押されていた。

熊さんの言葉ひとつに対し、此方は一つ応えた所で、其の魔法を相殺することは叶わず、減衰するのが精々、それが直線的な物であれば、そのまま走り回って逃げているという誰がどう見ても情けない光景。

「おいおい、どーした？　先刻までの威勢はよぉ、えぇ坊主？」

其の声に懸命に酸素を取り込もうと荒い息を付き、膝に手を当てうな垂れるように視線を地に落としていた僕は顔を上げてみると、

憎らしいほどニヤニヤと笑っている表情とぶつかった。
手札はまだある。けれど、ここでは使えない。
そう割り切って相対しようにも、目の前に居る熊さんはそんな余裕を持って挑める相手では無いことが嫌というほど思い知らされる。しかし、ここでその手札を切ることは、例え熊さんに勝ったとしても、そこまでにしかならない。
込上げてくるような考えは、何故僕の出身地はこんな、という思考。
しかし、それを納得することも、そんな言い訳に逃げる自分を許すことも、今はするべきではない。最悪ここで手札を全て晒したとしても、僕は『予選』の英雄という汚名を返上するべきだ。
できる、できないは後回し、今はやることを考えるのみ・・・・・・よし。青森県大好き。
自己暗示のように大好きと繰り返し、呼吸が落ち着いた所で気がついた。相変わらず熊さんはニヤニヤしているが、そういえば今まで動きがなかった。

「ようやく考えが纏まったって感じだな。それで、何とかなりそうなのか？」

「まぁ、猶予をくれたことには感謝しますよ。何とかなる以前に差が在り過ぎて、思考の迷路って感じ」

「感謝しなくてもいいぜ？　時間の経過ってのは平等だ。坊主のやってるのを見て何考えてるかわかっちまったしな。けどよ、そんな余裕、どこまで残せるかな？」

ですよねぇ、と小さく呟き、大げさな仕草で溜息をする。

ここまでは順調。そんな感想を顔には出さないように考える。こ

こからどうなるかというところだ。
最初から知名度の高い手札をぶつけ合うには相手が悪いのは百も承知。それを回避するにはどうするべきか。同盟を組むという話をしてから考え続けたのはそこだった。
予定通りの結果になったとき、其の先の打開策が欲しい。まともにぶつれば結果は見えている。ではまともにぶつからないようにするにはどうするべきか？相手の油断や隙を作り出すこと。それができれば一番だろうが、それに近い状況を作るだけでもできれば儲け程度の賭けになるかもしれないけれど。

今の熊さんの言葉通り、先を見越して、本戦に残ったときを考えて、知名度の高い手札を控えてくれれば、可能性はあるかも知れない。今までとは逆の状況。その状況になったとき、熊さんが走り回るという光景は想像出来ない。
次の一言で全てが分かる。そんな思いを胸秘め、僕はゆっくりと体勢を整え始めた。

そして、僕の耳が次に捉えた言葉はこんな感じだった。

「ちまちまやるのは好きじゃねぇな。派手にいこうぜ？」

それは、今まで眼にしたどんな魔法より、僕の心に突き刺さった。淡く夢想した顛末は、夢のままに霞んで消えた。想定した結果は、相手の性格を考えると有り得る結果なだけに、僕は自分の考えの甘さに歯噛みし、これから先の展開を厳しく手直しする。

「《函館》五稜郭」

其の言葉に僕は、瞬時に五芒星を模った史跡を思い浮かべる。それと同時に土方歳三の名前を思い浮かべた時点で、それは既に威圧感を伴うほどの形容を現していて、僕はゴクリと喉を鳴らした。

まずい。あれは戦時に作られたものだ。防衛だけの魔法とは思えない。それにあそこに僕は、一度行ったことがある。あそこには何が展示されていた？そこまで考えたときに、それが視界の中で動くのが見えた。ゆっくりとした動きながらに、その口先が追いかけるのは僕の居る位置。

気がついた時には走り始め、恐怖を振り払うように叫び声を上げていた。しかし、そんな僕の移動にも、流れるような滑らかな動きでその砲口は追尾していた。

もはや避けることは不可能、猶予も無い。惜しむべき状況は、当の昔に決別したはずだ。そして視線をそこに現れた要塞に向けて、熊さんの姿が見えないことに気が付き、更に自分へと追い討ちを掛けられた思いに駆られる。

対処、だけではまた後手に回る。打開策はそれほど多くは無い。其の中でも最善の一手は。

「青函トンネル」

狭くて暗いな、というのが最初に思い浮かんだ感想。そして、直後に届く轟音に、紙一重で助かったのだと肝を冷やす。

その後も立て続けに三度鳴り響いた轟音に、僕は見えるわけも無いのだけれど、崩れやしないかと上を見遣る。目に付いたのは只の黒い土のような天井。

僕が今いるここは、たぶん地下だろう。何メートルか先には上方から光が漏れており、其処までの道には明かりが一つしか灯っていない。道幅も新幹線が通れるほど広くも無く、ぎりぎりで猫車が通

れるかどうか。通路の天井までの高さも、二メートルもないだろう、あっても百八十センチくらいだと思われる。走るにしても姿勢を抑えないと頭を擦りそうで怖い。

急いで移動するべきだとは思いつつも、それでいいのか？と考えてしまう。

地上の様子が解らない。

五稜郭はまだ其処にあるのか？

熊さんはその内にいるんだろうか？

この先に見える光は出口で合っているのか？

それは何処に繋がっているのか？

止め処なく湧き上がる思考に、まるで逃げ腰な考えだなと溜息を吐くと、意を決して走り出す。青函トンネルなのだ、出口がは函館だろう、と。

光を抜けると、五稜郭の輪郭が霞んで消えていくのが見えた。そして、威圧感のある大柄な体躯をした人物の背中。その右腕が持ち上げられると、ガシガシと音がしそうなほど荒々しく頭を掻き出した。

「目標の消失、で効果切れか」

「あぁ、そんな感じだったんだ、先刻のは」

返事を期待した言葉ではなかったのだろう、呟くように洩れ聞こえた言葉に僕が返答すると、右腕の動きがピタリと止まり、次いでのっそりと音がしそうな動作で此方を振り向いた。

「そうなんだよ。聞いてくれよ、先刻の奴なんだがよ、目標が認識できる限りの砲撃継続って奴なんだよ。これはもう決まったと思ったんだが、思っただけにこうあっさりと終わっちまうとな」

其の言葉にゾッとするも、浮かんでくるのは苦笑だけだった。確かに聞く限りなんでそんな凶悪な、とは思うのだけれど、こう、しょんぼりと肩を落とすように意気消沈している熊さんを見ると、其れを見れただけで何か先程聞いた脅威が薄れていく気がする。

とはいえ、だ。まだ勝負はついていない。このままどんまい、と言って別れる事の出来る相手ではない以上、次の行動を始めなくてはいけない。

何を切るべきか、と自分の手札を頭の中に思い描く。できるだけ攻勢な印象を持つのはどれだろうか、と考えながら。

「さて、それじゃあ次は僕の番ということにさせてもらいまして」

そんな風に声を掛けたのは、未だ本調子には見えない、少し翳りが見える熊さんに、先刻の猶予時間に対する礼の意味も込めて。其の意図を察したかは解らないけれど、少し嬉しそうに口元を笑ませて、フン、という音が聞こえた気がするほど大きく鼻から息を吐き出すと、鷹揚に頷いてくれた。

其の光景は、特に僕の印象に残っていた。優しそうな、それでいてふてぶてしい。余裕があるように見える悠然と佇む巨躯。

そんな印象を湛えた姿は、次の一言を発した後、ついに見ることが出来なくなったのだから。

「霊場　恐山」

腰の辺りまでを覆う深い白。霧状に漂い、視界を塞ぐそれは、独特な臭気を放っている。
それと共に僕の右手には簡易なお堂が現れる。木造のどこか貫禄のある、古めかしくも妖しい雰囲気。

現れたその光景に、激しい違和感を覚えながらも、これが名前だけの知名度という物か、と変に納得していた。なんというか、一度現地に行ってみればいいよ、と言いたい様な。
知覚した効果は、対象の精神干渉。トラウマを刺激する幻覚。右手に現れた建物にはイタコさんが居るらしい。まぁ、ここまで来たら後はなるようになれだ。

お堂の正面にある格子目の観音開き戸が開け放たれると、そこから出てきたのは年若い女性。高校生だろうか、セーラー服姿だった。と次いで二十歳前後の女性、其の後にはそれよりもやや年上と見られる女性。　・・・・・・なんだろう？イタコっぽくもないし、この人たちが口寄せすんの？
まさかそれはないだろう、とは思いつつも、チラリと熊さんの方を見ると、僕は驚いた。

あんぐりと口を開け、一人、また一人と視線を移していくにつれ、其の表情から血の気が引いていく。どうにも三人の女性に心当たりがあるようで、その心当たりというのにも良い印象はないらしい。
現れた時と同じ歩調で其の距離を詰めていく女性たちに、熊さんが後退りをし始めていた。何だろう、これだけ効果があるという事は、これは期待できるんじゃないか？

そして其の距離が互いに手を伸ばせば届く距離に達した時、その内の一人が口を開く。

「■■■君って、ひどいよね。乗馬体験の時、お馬さんって怖がりなの知ってるくせ、私が乗ったお馬さんを大声で驚かせたりしてさ。おかげさまで見てよこれ。右肩脱臼しちゃったの」

「ち、違う。知らなかったんだ！　少し驚かそうとしただけなんだ！まさかあんな事になるとは思ってなかったんだ！！」

あぁ、それで沼から出る時。まぁ、確かにお馬さんだけじゃなくて、熊さんがいきなり現れた上驚かそうとしたとか、僕でも吃驚して腰を抜かしそうだ。

「ねぇ、お兄ちゃん。私、結婚断られたの。彼ね、死にたくないって言ってるの。何でだろうね。ねぇ、お兄ちゃん」

「わざとじゃないんだ！事故だったんだよ！　確かに嫌ってはいたけど、でも俺は駅まで送っていこうかと思ってただけなんだ！　雨のせいで視界が悪かったんだ！！」

なんか、どんどんと話の行く先が人生を左右しそうな流れになってきてないかなぁ。これ、聞いちゃっていいのかと誰かに大声で問いたい。さすがに僕も居た堪れなくなってくる。

「■■■君。どうしよう？　できちゃったみたい」

「黙れ！詐欺師め！！　先輩面して近づいて来やがって！　それが

嘘だってことは知ってるんだ！！」

だめだ、これ以上聞けない！そんな悲鳴を僕の心が叫んでいた。
当事者では無い物の、いやこの光景を引き出したのは自分であるのだから当事者かもしれないけれど。とにかく今はそれどころじゃない。僕に出来るのはこの悲劇を終わらせることだけだ。

「《三沢》空軍」

其の言葉の後に僕の背後に何かが存在を主張するように現れ始める。それを認識し、対象を意識したと同時にそれは動き出し、僕の上空から一息に滑空を開始すると、吸い込まれるように熊さん目掛けて突き進んでいった。
その黒光りする機体は熊さんの巨躯へとぶつかるとど同時、霞むように消えていく。
唸る様なエンジン音の変わりに、「ぎゃふん」という言葉を置き土産に。

１０（後書き）

北海道にてホテルに泊まった朝、受付のお姉さんに何処か景色の良い場所は無いですか？と尋ねたことがあるんですが、その時の返答で聞いた場所は「摩周湖」という場所でした。

ありがとうございます、行ってみます、と言って意気揚々と出かけようとした時、私の歩みを止めたのは、その隣に立つ受付の青年の言葉でした。

「普段は霧が掛かっていて見ることが出来ないとして有名です。言い伝えではその湖を見ると結婚が出来なくなる、といわれる位、その湖を覆う霧は晴れないことで有名です。もし見られなくても、そういう物だと思っていただければ」

そして、辿りついた場所には、大自然の只中にある見事な湖の水面が見えました。其の景色の美しさに喜ぶ反面、何故か涙が込み上がりそうになりました。

北海道、また行きたい。

作中、諸地方の名称、人名、特徴を使用し、それを不愉快に思われた方もいらっしゃるかと思います。遅れての通知であり、申し訳有りません。

これにて予選Ｂは終了です。

残りの予選は、ダイジェストとして書くかも、という感じです。

11

「あ〝あ〝ぁぁぁ・・・・・・・」

どんな声出してんだよ、と呆れながらに僕が横を向くと、まるで人生に疲れたかのように体を投げ出し、畳んだタオルを顔に乗せて表情を隠した青年が、そんな僕の反応も気にすることなく又もどこから搾り出しているのか見当もつかないだみ声を発した。

「ほんと、しんどい・・・・・・・」

そんな青年の言葉に、あれじゃあな、と苦笑いが浮かぶ。

予選二日目、その初戦である予選Dに、この青年は含まれていた。解説のディストさんの話を聞く限り、過去の試合から優勝候補といえる選手が、その枠内に三名居るということで、興味を持って見ていたら、こいつが立っていた。その枠内の最有力候補の肩書きの名前で呼ばれながら。

『双璧』と呼ばれていた、神奈川のこの青年は、そこで『猛虎』と呼ばれた大阪のおばちゃん、『要塞』と呼ばれた京都の恰幅のいい四十代と思われる男性と、熾烈な攻防を繰り広げながらも、今現在敗北による言語強制を受けずに会話をできる結果でその試合を制していた。

まぁ、棚ぼた的な結果でもあった気がするけど。それでも勝ちは勝ちですよね。

「あら？先客、ってほんとあなた達仲いいわね」

そんな失礼な言葉に眼を向けようとして、隣の青年の体勢にビッ

クリした。何時の間にそんな悠然と佇むような姿勢に、そしてその無理やり作ったような余裕のある、と見えてくれたらいいなって顔になったんだよ。まぁ、声で相手が解る位にはこの声の主とも付き合いがあるしね。

ちなみに、僕達がいるのは湯船の中。そしてこの声の主はもちろんあの女性。

女性であるのに、やっぱりそのまま入ってこようとしているのを見て、なんだかなぁと抵抗を覚えつつも、この三人での構成となると僕の立ち居地は傍観者で決定しているのだから、前回のようにやんわりと相席を断るということはしなかった。

「まずはお疲れ様。それにしても青森に神奈川ね。本戦に残ったのって、宮城の私と東京と沖縄、後どこだっけ？」

「俺はもう、自分の試合終わってからくたばってたからな。その後の試合見てねぇわ」

「後一つは、宮崎だったかな」

そんな挨拶を皮切りに、これまでの予選のことを話し合う。あの選手はどうだった、あそこであれは失策だったように見えた、あの選手は判断の早さが、勝ち残った選手で使用済みの魔法はどんな感じか。

最初こそそれに腰を入れて話し込んでいたけれど、やはりというか、一つの名前が出ると、途端に空気が重くなる。

「やっぱり、東京だよねぇ。ぶっちゃけさ、あれに勝てるの？」

「無理じゃね？ていうか、無理じゃね？」

「諦める早いから。てかさ、僕が言うなら解かるけど、神奈川が無理とか言っちゃ駄目だろ」

「だよねぇ。せめて死んでもいいから止めてみせるくらい言って欲しいよね」

「死んでまで止めたいとか思わないから」

「じゃぁ、止めなくていいから死んでみせるとか」

「何それ！意味ねぇだろ！あれ？　それって何が言いたいの！？」

「え、いやだってやる前から無理って言ってるような人だし？　死んでもいいかな、って私なんかは考えるんだけど、どうかな？」

「どうかな？　じゃねぇ！　何で無駄に可愛らしく言ってんだよ！　てかお前らも言ってるじゃねぇか！」

「え？僕達そんなこと一言も言ってないよ？」

「嘘付け！　思い返して見れば解かるんだ！　今の会話だ、思い返して、思い、返せば・・・・・・」

どうやらそれなりには記憶力があるらしく、思い返して見て、無理だとか言ったのは自分だけだと悟ったように、先ほどまで漲っていたツッコミオーラが萎んでいく。

そんな光景に、いつも通りのやり取りに、ほんのりと満足した気分になった僕が、あの女性に視線を移すと、とても楽しそうに微笑をたたえ、瞳には嗜虐的な輝きを浮かべながら、青年を見つめていた。

あぁ、きっと彼はせっかくのほぼ貸し切り状態のこの広い湯船で、先程の熾烈な攻防で積み重なった疲れを癒すことが出来ず、更なる精神的な負荷を上乗せして枕を濡らすんだろう。いや、案外ケロッとしてるかもしれない。

「まぁ、それはいいとして。実際問題どうにかならないもんかな」

そんな風に、青年の尊厳とかその他色々を切って捨てた僕に、ギュインと音が聞こえそうな勢いで首を振り向けて睨みを利かせた青年が居たけど、僕はその反応もどうでもいいものとして華麗にスルーしてあげる。それより考えるべきは明日の対策。

「そーいえば、君って予選の時、北海道と組んでたでしょ？　あれって君が考えたの？」

まぁ、やっぱり気がつきますよね、と思いながらゆっくり首を横に振る。あの話を持ちかけてきたのは熊さんの方で、それに乗ったのが僕。そこからのことは二人で考えたけど、其の時点で決めれることは限られていた分、あれが限界だったけれど。その辺の経緯を軽く説明する。

「俺ら三人組んで先ず東京を、って感じじゃ駄目なのか？」

「可能性としては、三対一対一対一でしかないね。纏まっちゃうとここぞとばかりに一網打尽を狙われそうだし、挟撃しようにも、一人になったところを誰かに狙われたらそっちの対処で挟撃という図式は崩れる」

「うちらが東京に集中しても、残り二人で仲良くしてもらうっての

は、無理かな？」

「その可能性は低いと思うなぁ。僕がその状況になったらさ、その三人と東京の決着が付くまで、手札を晒さないように立ち回りたいし。其の点で考えても、傍観しつつ、隙を見てって感じだろうね」

「芳しくないな。つーかそこまで考えてんなら、最善策というか、何かねぇの？」

自分で考えるのに限界を感じたという訳ではなさそうだけど、神奈川の青年は諦めたように溜息を吐き出していた。宮城の女性も似たような物で、しかし何故か二人とも僕を見る視線だけは外してくれない。

「まぁ・・・・・・無理でもいいから最善策というなら、東京を取り込む」

観念して吐き出した僕の答えに、面食らった顔を向けてくれた。まぁ、考えないよね、こんなこと。それを証明するように呆れ顔に変えた青年が

「予選見ただろ？　あいつが誰かと手を組む様に見えるか？」

「うん。だから無理だってのは解かってる。けど、最善策というなら、これが最善だと思うよ」

「じゃあ、次善策もあるの？」

「他の二人を取り込む。これが次善策だけど、本戦で東京とやり合う為に必要な最低ラインでもあると思う」

「だろう、な。俺もそう思う。問題はどうやって、てところだよなぁ」

「会うだけなら、食事時に会えると思うけど。信頼関係とかがネックかなぁ」

「まぁ、本戦は明日の夜だって話だし。それまでに出来る限りのことをするしかないね」

其の言葉に頷き合い、明日の朝には食堂に集合しようと約束をして、その日の会議は終了した。

「お、坊主じゃねぇか。あいかわらず朝起きるのはえぇな」

食堂に着いた時、僕が一番乗りかと思ったら熊さんがまたもや蕎麦をかっ込んでいた。僕としてはあんな熊さんを見ちゃった後なだけに居心地悪く微妙な笑顔を浮かべて手を挙げ、それに応えることしかできなかったのだが、そんな僕を気にすることもなく手招きされた。

「あー、あれは気にすんな。忘れろ。頼むから忘れろ。で、こんな時間に来ても蕎麦しかねぇらしいけど、また腹でも減ってんのか？」

「あぁ、いや。今日の本戦のことで待ち合わせを」

「何だ、また悪巧みかよ。で、今度はどんなことするんだ？」
「まぁ、予想は付いてると思うけど。対東京同盟の準備を」
ズズズッ、と豪快な音を鳴らして一息に蕎麦を啜ると、ごっそうさんと呟いて熊さんは丼を置いた。
「で、今どんな感じなんだ？」
「神奈川と宮城と僕。できれば沖縄と宮崎を取り込みたいって所」
「もう二人は、あぁそういえば坊主とよく一緒にいたもんな。だったらいっそこっちに手を出したら三人で最初に潰すぞって脅せばいいんじゃねぇの？」
「其の間東京が静観してくれる確立低くない？　初戦で開始と同時に動いてたし」
「じゃぁ、そっちを神奈川に任せて、二人で各個撃破とかは？」
「厳しいね。主に僕達の負担の方」
其の後も考えられる可能性を、こうだったらどうなる、こうすればいいんじゃない？みたいなことを話していると、足音が二人分聞こえてきた。
「おはよう、早いんだね」
「おはようございます」

会話を止めて其方に振り向くと、宮城の女性と一緒に居たのは、あの青年ではなく、僕よりも若い少年だった。

「おはようございます。一緒にいる人は、確か沖縄の？」

僕も挨拶を返しつつ、確信はあるけども、会話を振るために疑問の形で言葉を向ける。

「はい。部屋を出たところでこの綺麗なお姉さんに捕まりまして。少しどきどきしながら聞いてみると、僕に話があるのはあなただそうで」

もう、ほんと皆何で僕にそんな役割を押し付けるんだろう。其の気持ちを恨みがましい視線で女性に向けるも、返ってきたのは貼り付けたようなスマイルだけだった。あぁ、あいつが居ればと、こんな時だけはあの青年の存在を、僕は心の奥底から切に望んだ。

とは言え、この状況は願ったり叶ったりでもある。出来るならば思惑通りに引き込みたいけれど、僕はそんなに口が達者じゃないんだよなぁ。

「まぁ、言いたいことはわかると思うけど。東京対策で手を組まない？」

予想通りであったのだろう其の一言に、表情を変えなかったのはその少年だけだった。何だ二人して、その呆れたような顔は。

「東京に勝つつもりなんですか？」

「うん、そう。出来れば早めに退場願おうかと」

「出来るんですか？」

流石というか、最初の誘いに表情を変えなかった辺り、この話だと予想していたのか、其の先を考えてきたようで、次々と言葉が飛び出してくる。とはいえ、僕もそれは考えてきているだけに、其の先の会話もあっさりと返す。

「予想では八割の確率かな。宮崎もこの話を飲んでくれれば九割以上は」

その答えの速さに、少年の言葉は一度停止。まぁ、考えるだろうことは、其の言葉の真偽だろう。さてどう返してくるかと待とうと思っていると、やる気なさげな雰囲気を纏う青年が現れた。

「おいすー」

其の声に少年が振り返り、ぼそりと「神奈川・・・・・・」とつぶやくと、此方を振り向いて再び考え込んでいた。この少年は思考に沈むとそれに集中しちゃうタイプなんだろうな。青年に挨拶もなく此方を振り向き、その青年も思考の中に組み込んでまた考えているのだろう。

その邪魔をするのも悪いかなと思い、僕も青年への挨拶に声は出さず、手を挙げる返礼だけに留める。

「現状、青森のあなたと宮城のこの女性、それに神奈川の青年。そこに沖縄の自分を加えて、東京への勝率が八割。それも早期決着を狙って。本当にそれが可能だとは思えないんですが」

「予選で試合やってみてさ、ふと思ったんだよね。魔法食らってさ、

敗者となった人があの魔法使いの人に安全な端っこの方に移送されるまでそれなりの時間があるんだけど。ここまでじゃわからないかな？」

其の言葉に困惑顔が三名と、難しい顔が一名。まぁ、其の一名は誰と言わなくても解かるだろうけど。

「で、少年に質問だけど。ぎゃふんと言った敗者にさ、その言葉を聞いた後、警戒した？」

「・・・・・・そこからはもう意識は別に向けてましたね。そういうことですか」

「早期決着を狙う理由は解かると思う。長期戦で一番有利なのが何処かは考えるまでもないしね。だとしたら、勢力の図式を解かり易く示し、其の上で一箇所に穴を、意識の外が出来る場所を作る。こんな感じかな」

「・・・・・・そんな秘策というか、簡単に漏らしていいんですか？まだ僕は手を組むとも言ってないんですけどね」

僕の考えを吟味し、深い溜息をひとつ吐いた後、その少年は探るように言葉を選んで僕に投げかける。その内容は、僕以外の当事者二人にとって心臓に悪かったようではあるが、少年の表情が見て取れる僕にとってはただの通過儀礼的な言葉でしかない。

「言ってはないけど乗り気だよね。まぁ、僕としては、この話を君にした理由もわかってくれたらありがたいかなぁ」

「・・・・・・プランの掲示、其の他は、単純に脅しですか？」

「ないない、脅しとか。何だってそんなことを」

「手を組んだ時のことを考えていたということは、拒否された場合のことも考えているんでしょう？これと似たようなことを」

其の言葉に僕は苦笑するほかなかったけれど、明確には返事をしなかった。それをこの少年がどう受け取るかはわからなかったけど、他の三名は確りと誤解をしてくれたようだ。ぶっちゃけそんなこと考えてなかったしねぇ。断られたら負けを覚悟でどうにかがんばろうと考えていただけだよ、ほんと。

「まぁ、話を戻すとね。そのやられ役にスカウトしたいってことかな。最初は僕がやるしかないかなと思ってたけど、君と話してみて、僕よりも上手くやってくれそうだと思ったからね」

「それは辞退します」

残念、と呟いて溜息をつく。そんな迫真の演技を自然にできる度胸など僕にはないだけに、是非にとスカウトしてみたものの、こうも素気無く断られると、なんか込上げてくるものが有るね。それに周りの表情も悪い笑顔だし。あぁ、胃が痛い。

「それで、結局どーなるんだ？」

そんな青年の声で、自然と少年へ視線が集まる。

話の流れで、僕だけじゃなく、皆返事は肯定を示すだろうとは思ってるだろうけど、確かに実際口にした答えを聞いておきたいとも思う。

僕らの視線と青年のその言葉に、少年は軽く頷くと、歳相応の爽

やかで張りのある声で其の意志を言葉にした。

「よろしくおねがいします」

青年と女性の歓声、熊さんの暖かな眼差し、それと僕の安堵の雰囲気を受けた少年は、この日顔を突き合わせてから、初めて笑みを浮かべていた。

「宮崎はどうする？」

「ん？あぁ、それなら昨日話つけといた」

そんなさらっと出された青年の返答に、先ほどの遣り取りを丸投げされた僕としては、うれしいよな釈然としないような。まぁ、面倒が減ったんだし、これでいいんだ、と納得して、其の後は五人で軽く食事でもと、蕎麦を頼んでから会議を再開しはじめた。

途中、そういえばこの熊さんは何でいるの？　という青年の視線に、いやここまで来て除け者にするのも悪い気がすると思うし的な視線を返すことをしたりしなかったり。

本戦まで後半日。そこでの僕の役割を考えると胃が痛むけれど、出来る限りの努力はしたのだ。後は頑張ってやるだけだろう。

願わくば、予想通りの試合運びにならんことを。

１２（前書き）

情けないことに、書き始めて間も無く風邪を引きました。
考えながら書くには、風邪は本当に厄介ですね。まるで進まない状態に、思いついては消し、消しては何も浮かばず。そんな土日を過ごした作者です。少し短いかと思いますが、ご勘弁を。

最近漸く季節が変わってきたと実感でき始めてきましたが、変わり目なだけに皆様健康には十分注意し、私の様にならないことを願います。

12

「これより本戦への出場選手には移動して貰う。予選Ａの勝者から順に送ることになるわけだが、前回までと同様、少し間隔を空けての移動だ。
これで最後となるわけだが、そうだな、私に言えることは少ないか。健闘を期待する」

前日の敗者だけは姿を見せず、少し寂しい感じのある食堂に魔法使いの男の人が現れると何時ものごとく唐突に声を上げ始める。
そんな見慣れた光景に微笑をしつつも、僕は緊張に早まる鼓動に思考を占められる。
いよいよだ、と。もうすぐだ、と。浮かんでくる物もそんなことだけで、そこから先が浮かんでこない。あれだけ話し合い、意見をぶつけ、ぶつけられ、悩み、笑い、手をたたき、顔を突き合わせ――。

「まず一人目。東京都」

「皆様ご存知の『最強都市』の登場です！正に王者！　落ち着いた物腰、鋭利な眼差し、其の口元には余裕の笑みを浮かべての登場です！
ディストさん、やはり『最強都市』の登場ともなると観客の盛り上がりも別格ですね」

「今年は特に魅力的な選手でしょうからね。初戦での活躍も、まさに魅せて勝つという、其の実力を伺うことの出来るものでしたからね」

「さて、続いて沸き起こる歓声に迎えられて現れたのは『予選の英雄』と呼ばれては、これまで本戦へと駒を進めることの出来なかった選手であります！
今年は、遂に！遂に！　悲願を果たしたとでも言いましょうか！
本戦でその雄姿を、活躍を胸に、堂々の登場であります！」

「去年の予選で魅せた、『最強都市』との一騎打ちは印象に深い光景でしたからね。今年は両名、本戦へと進んでおります。そして、今年の選手もまた去年に引けを取らない優秀さを見せていますからね、これは期待できるのではないでしょうか」

「初日最後の予選C。まさに『楽園』という名に相応しい光景を魅せ、そして本戦へと進んだ、『楽園』の登場です。其の容姿からは想像も出来ない程の貫禄を内に、悠々と紡ぐ言葉の数々が繰り広げる光景は、まさに楽園。
本戦でもまた同じような活躍をしてくれるでしょう」

「本戦への出場回数も多いですからね。其の上今年の選手は若くはありますが、理知的で落ち着きもみられます。『最強都市』を前に変わる事の無い態度を貫けるというのは素晴らしいといえるでしょうね」

「そして！この歓声です！　『双璧』の登場です！

今年一番の名勝負！攻める『猛虎』、防ぐ『要塞』、それを下した『双璧』の攻防の数々は、この歓声からも解かる通り、まさに今年一番の戦いだったでしょう！

過去、一度の優勝を手にしたことのある『双璧』ですが、その時最後の相手は『最強都市』！

予選の光景からも、優勝候補の筆頭として挙がる名前でしょう。

私としては、一番注目している選手でもありますが、皆さんはどうでしょうか」

「昨日の予選、その初戦でありますが、あれはまさに本戦と言えるほどの攻防でしたね。

例年、『最強都市』と『双璧』の攻防は他に類を見ない程熾烈な鬩ぎ合いとなるのが常でしたが、今年もまた其の光景が見られるのではないでしょうか」

「今年の本戦での紅一点。『雪月花』の登場です。本戦への出場はこれが二度目と言うこともあり、そこに秘められた可能性は今大会で花開くのでしょうか」

「松島の『雪月花』。予選では見られませんでしたが、逆に言えばそれを残しての本戦出場ということですからね。その他どれ程の実力を持っているのか、期待できますね」

「そして、最後の選手。『予選の英雄』に続き、本戦初出場となります、『九衆』の一角、『竺紫の日向』の選手の登場です。予選ではその――と、これは、どう見るべきでしょうか。

未だ開始の合図の鳴る前ではありますが、『最強都市』が移動をしていますね。これは、問題にならないのでしょうか？」

「そう、ですね。微妙なところでは在りますが。位置的に優位性を確保するためにという移動ならば、即座に警告なりはありえるでしょうが。これは、逆としか言えませんからね。
予選の時と同様、囲まれるように、その中央へと躍り出ているということですから。
これを認めるということは、開始前の移動を認めると同義でもありますから、判断の難しいところかもしれませんね」

「今のところ、止めに動く気配はありませんが、移動を終え只一人本戦の選手に囲まれるように立つ『最強都市』ですが、なにやら決めポーズまで披露してますね。と、ここで進行役である『金獅子』が場内へと登場しました」

「どうなるでしょうね。もしこのままの位置で続行となれば、今までに無い光景を望めそうでは在りますが」

六人目の宮崎の男性が現れてから程なく、一人、中央へ向けて歩き出す人影があった。
スタスタ、と軽く歩く其の姿は、何の気負いも衒いもなく、さも日常の中にあるような、そんな風にさえ見える自然さで。本戦へと駒を進めた残り五名に、囲まれる様に、その中央へ。
その足が歩を止め、状況を確かめるように顔をグルリと回し、其の視線の全てが自分へと向けられているのに満足そうに一つ頷くと、其の表情を引き締める。

両足を肩幅よりやや大きめに開き、右肩を上がり気味に、左肩を落とし気味に下げ、右腕を伸ばし、其の手を開いて指先までも伸ばし。左腕は腰の当たりで曲がり、曲がった先の左手は顔の前へと伸び、其の左手にある五本の指は限界まで開かれ、それを顔の前へと翳している。

「何だ、あれ？　あれか？ズキュゥゥゥゥンとかいう効果音が付く類の決めポーズか？」

「何で私にそれを聞くのよ」

「いや、だって隣に居るし」

「まぁ、そうでしょうね。解かる人居るの？って話だけど。うん、なんというか、ここに居る六人は皆知ってるようね・・・・・。私も同類に見られるのって、なんだかなぁ」

「いや、だって解かるってことは同類でいいんじゃねぇの？」

「知ってる？作者の出身地。私のとこなのよ？」

「・・・・・・まじで？」

「まじで」

行き成りな展開に、やや唖然としつつも、ここでまさかのＪＯ○○立ちに、感嘆というか、呆然としていた僕は、向こうで二人が何か話をしているのを見かけ、何だろうと思っていると、女性がグルリと周囲を見回し、たかと思うとやるせなさそうに溜息を零していた。

何だろう、途中、僕と眼が合った気もするんだけど。

とは言え、このままの位置で試合が始まるとしたら、願っても無い展開ではある。予選での東京は、まるで電光石火、疾風怒濤の如き果断さが目に付いていた。ここでも同じことをされたとなると、この囲みこむ状況を作るのにも一苦労させられていただろう。それも、犠牲も考えうる上で。

右側、今はその位置に居るべき人物は中央へと進み、隣人までの距離を大きく開けた場所に、自分も動くべきか悩む。六角形の状態から一角が抜けた状態よりは、五角形を描く様に位置取ったほうがより囲む上では有利な気がする。前方からの攻撃に注意が向くと、後方は死角となる。真後ろなら尚更だろう。

チラリと左を見ると、同じようにその空いた場所を見て悩むように顎に手をあて、思案顔で立つ少年。考えることは同じかと思っていると、不意に眼が合い、お互いに照れくさそうに笑む。それから軽く頷き合うと、ゆっくり、ゆっくりと、脚を動かす。音もなく、目立つこともなく、それでも少しづつ。

「随分とまた豪胆なことだな。ここが本戦で、そしてこの位置がどういう構図となるか知っても尚その態度のままというのは。本来な

ら止めるべきなのだろうが・・・・・・・さて、どうしたものか。
一応確認しておくのだが・・・・・・その決めポーズの為だけに、目立つためだけに移動したのではなく、このまま開始して構わないということなのだな？」

「フヒヒ。当然」

「わかった。ならばこのまま始めよう」

再び闘技場の中は六名へと戻る。それに少し遅れて、興奮冷め止まぬアナウンサーの金切り声と、それに応えるように轟く割れんばかりの歓声に、負けじとばかりに鳴り響く、試合開始のゴングが鳴り響いた。

13（前書き）

本戦前半です。

13

「《鎌倉》鶴岡八幡宮」
「羽田空港」

鐘の音の鳴り止まぬ開始直後。
ワンテンポの差が辛うじて分かる速度で、神奈川の言葉に東京は反応し、即応する。
瞬時に出来上がる直線の道は、東京の男の足元へ伸び、巨大な門構えの如くその間に立ち昇る朱色の鳥居が現れたと思うと、神奈川の青年の足元から寺社仏閣らしき建造物が形作り始めている。
それが形作るそこへ、ジェット音が飛び込むと同時、それらの光景はすべて霧散して行く。

「津軽富士　岩木山」
「東京湾」

海原の如く広がる白い雲を突き抜け、其の威容を誇るように隆起し、聳え始めるその真下。
重なるように展開された魔方陣は、それを飲み込むように水没させる。

「《仙台》　七夕祭り」
「隅田川　花火大会」

視界が広範囲で暗く闇に捉われるように、数メートル先を辛うじて見通す事が出来るというそんな中、中空に光が現れたかと思うと、それは色彩も鮮やかに、豪華絢爛たる極彩色へと彩りを変え始めていた。

それに視線を奪われるように釘付けとなろうかという時に、轟音が轟く。
中空へと向けられた視線、其の先に華が咲く。
その上空に見える華は、中空に浮かぶ極彩色を打ち抜き、其の後に出来た通り道を抜けた物であるらしく、次々と上がる光の筋は、その数を数える気力も暇も無い程に次々とその数を増していた。

「知名度対策をしましょう」

その一言に、昼食を取るべく同じ卓へと腰を据える、本戦出場者であり、東京都以外の四名へと僕は言葉を掛ける。

「それはいいけど、何やるんだ？」

うまそうに焼き上げられた肉にがっつきながら、神奈川の青年が声を発する。

「知名度の判定はその闘技場内の選手に因る。
ある程度知名度が低そうな物は、ここに居る五人で情報を共有させて補完しておけば、魔法の効果が上がるということでしょう」

少年らしいというか、ハンバーガーを片手に、しかしがっつくことはなくゆっくりと咀嚼していた沖縄の少年は、流石というか説明無しに僕の言葉を飲み込み、その先を補ってくれる。
それにほー、と感心している青年には、何故か微妙な物を見るような視線を向けてしまう。いやまぁ、今までの反応もそんな物だっ

たはずなんだけどね。こう、出来る人間を見ちゃうと、なんというか、なるよね。

「東京を出来るだけ早めに落とす予定なんでしょ？
てことは、その対策ってのは、其の先を、ここに居る五人になってからの事を考えて？」

少し納得がいかない様に、僅かに表情を曇らせながら話始めた宮城の女性に、ゆっくりと首を振り、其の間に言葉を纏める。

「東京のそれは、厭くまで予定でしかないんだよね。確定できるほど甘い相手じゃないってのはいうまでも無いだろうけど。
僕が考えているのはその予定が外れた場合の対策、次善策でも代行策でもない、敗走の仕方って感じかな。備えあれば憂いなしって言葉の方が聞こえがいいかな」

その言葉にあぁ、成程と今度は苦い表情で納得を示した。

「取り囲んだとして、そっからはどーすんだ？　一斉攻撃？」

思いつく事を思いついたままに、という感じで話し始める神奈川の青年。
そこが確かに考えどころなんだよなぁ、と考え込んでいた僕は、「誰か意見は無い？」と言葉を周りへ向ける。それに応えたのは宮城の女性。

「一斉攻撃もいいだろうけど、それだと予選と同じ結果になるんじゃない？」

そうなんだよね。一度、そんな場面あったよなぁ、とその光景を

思い出す。
予選Ａでの試合、囲みこむように東京都の周囲を六人が位置取ったと同時、各々が意志を統一することもなく発した言葉は、ほぼ同時だった。
それに対する東京都は「東京ドーム」の一言を持って、そのすべてを無力化し、次いで発した言葉に捕らえられた一人を打ち破っている。

考えられるのは

「東京ドーム」の効果が切れる前に到達した、それら全てに対して同じ効果をもって反映し、其の全てを相殺した。
「東京ドーム」の効果が、時間防衛であり、時間切れ前に全ての攻撃が到達し終えたがためにその全てを相殺したのか。

前者なら、一斉攻撃にメリットはない。
こちらは五人が結託して対東京用の手札を増やしているのに、それを繰り返すしかないとなると結託して増やした手札も、湯水の如く浪費していく。
後者なら、タイミングをずらす事で解決はするが、その合間がネックとなる。こちらがタイミングを見計らっている間にも、あちらは手を休める理由が無い。そすると後手へ後手へと周り、連携が取り辛くなるだろう。

「立ち位置さえ上手く取れば、時間差が一番いいと思いますが」

沖縄の少年の其の言葉に、僕は視線を向けて先を促す。

「五人、ですから五芒星をイメージして貰って。
その頂点の位置に各々が位置取り、そこから一筆書きの流れで、

順番に攻撃をすれば。
前からの攻撃に対処した次は、後ろからの攻撃が始まり、それに対処しようと注意をそちらに向けた後は、また後ろから。その繰り返しで行ければ、悪くは無いと思うのですが」

成程と頷きながら、それが一番良いように思う。これ以上はないと思うほどに。
その僕の満足気な頷きに、少年も誇らしげに表情を緩める。いや、僕が納得したからといって、他の人も納得しているとは・・・・・・思えない訳ないですよね。少年以上に僕の頷きに、これ以上考えなくても良くなって幸せ、ってはっきり顔に出る位安堵しているし。何だろう、僕が決定権を持ってるみたいな空気になってない？失敗したら全部の責任は僕？・・・・・・胃が痛い。

そんな中で、聞き役に徹しているように少し表情の明るい宮崎の男性に、「聞いてて、何か思いつく事は無いですか？」と僕は質問をぶつけてみるも、ゆるりと首を振り、また僕達が会話を再開しても、そのまま聞き役に徹して、相槌を打ったり、少し困った顔を見せるだけで、積極的な参加は見られなかった。

思えば、その時もう少し疑問を持っても良かったのだ。
東京の早期脱落作戦を予定していると話す僕達を優しく見守るような視線に。
自分ではこうしたい、こうすれば等、まるでそれに意識が向いていないように考えを口にしない事に。

試合開始の時、互いに視線を交わして頷き合うその時に、其の視線が向けられていた先が何処へと向けられていたのかを。

「《宮崎》　地鳥」
「《上野》　動物園」

其の言葉を聞いた後、僕は次の人はと沖縄の少年へ視線を向け、其の少年の顔に大きく見開かれた瞳を見、その向けられた先へ瞬時に視線を切り替え、其の先で起こっている出来事に言葉を失った。

宮崎の男性は体を右に向けて言葉を放ち、そうなることが当然の如く体の向きを神奈川に向けている東京の男性。

事態が飲み込めない。思考が追いつかない。何が起こったのか理解できない。

そんな僕の境遇には関係なく時は進む。

僕と同じように油断していたのか、宮城の女性は対処できていなかった。

僕とは違い、焦りを見せつつも「小田原城」と言う青年が、何故か眩しく見えた。

そして、やはりそんな僕を待ってはくれる筈も無く、事態は更に進む。

「シーサー」

其の言葉に反応し、視線を向けた先。
沖縄の少年の体を、こちらを向いていた。

「ぎゃふん」

という言葉がその闘技場内に二つ響き。
先ほどまでの優位を浮かべた表情を翻し、振り返る東京と宮崎の男性の視線がこちらを向くのを感じつつ。僕と女性は崩れるように、その場へと沈み始めていた。

14

俺の人生は、そんなにトントン拍子に物事を好転させたことが無い。

それが解かっているだけに、何処かで人を疑って生きて来た気がする。

目の前に見つけた石を見つめ、躓く前に取り除けようと蹴飛ばすと犬に当たって追いかけられる。

よく話しかけてきてくれたクラスの女子に、勇気を持って告白したら、その娘の好きな人は実は俺の親友でしたという落ちがあったり。

道に飛び出た子猫を避けようと車のハンドルを強引に切ると、そこには自転車に乗る学生が居て、焦りに逆ハンドルを切るとスピンし、そのまま後続の車に衝突される。

先輩の合コンの誘いに嬉々と参加し、人数合わせにもならない雑用係をさせられたり。

思い出すだけで碌でもないとは思いつつも、それらですらまだこれまでの人生の一部でしかないことを思うと、気分を暗澹とさせるのだが。

可能な限りに備えれば備えるだけ、それを信用しきれずに。

気軽に付き合える人間が出来れば出来るだけ、それを信頼しきれずに。

それがどれだけ疲れる生き方かは身をもって知っているが、しか

し止めることができない。
今回もそんな自分の身構えが、きっと功を奏したのかもしれないが、やはり自分の人生はそうなるべくしてなったのだな、とまた暗く意識が沈む思いがした。

宮崎の男性が東京の男の下へと歩み寄るのを見て、もはや隠す気も無く露骨にその関係を見せ付けるのを、込上げる怒りを視線に乗せ、それでも態度は変えずに見遣る。
そして、それに併せる様に此方に近づいてくる沖縄の少年に警戒の色を見せつつも、その動向を注視しつつ、即応できるように言葉を探る。

「二対二ということか。まぁ、東京と神奈川が分かれたのは、観客としては楽しめるだろう」

東京の男の言葉に、それでも腑に落ちないものを感じつつ沖縄の少年を見る。

今の言葉を信じるならば、この少年はあちらの息が掛かっていないということになる。それは、厭くまでもその言葉を信じるならば、だが。
疑うべきは、とここで即座に少年へ矛先を向けるには状況が厳しすぎる。
少年の注意は厭くまでも東京と宮崎に向けられ、此方を警戒するそぶりは見せない。
信じるべきか？　という思いが思考を掠めるのだが。
先程青森の、あの何処か頼りなさ気で、会う度に人を小馬鹿に扱うような態度を取っていたが、実際はただのお気楽でいい加減なお人好しでしかない、皮肉気な笑みをよく見せていた青年を思い出す。
その青年に、この少年が手を下したその場面を。

それでも彼我の距離が近づくにつれ、そんな俺の心情を他所に、東京と宮崎は攻勢を開始せんとばかりに口火を切る。
それに反応するように、俺と少年も迎撃の姿勢を取り

「宮崎は僕が、東京を頼んでも？」

という言葉を聞く。それに眉を顰め、少年を見ると。
真剣な眼差しを此方に向けたまま、それでも揺ぎ無い意思を伺わせる表情のままに口を動かしていた。その口から声は発せられることは無かったが、その口の動きから推察する言葉は、たったの三文字だけ。

い・お・う？

読み取れた口の動きから思考をフル回転させ、その意味を探る。それが答えに辿りつく前、耳に入ってきたのは東京の男の声にその思考は遮られ。
反射的に翻した体は東京の男に向けられ、それに併せて意識の全てを集中するように耳を、眼を、そして思考の全てを其の男の一挙手一投足に固定する。

「レインボーブリッジ」

膠着状態を向かえた四名の選手を見、今の内に敗者を退避させて置こうと身を乗り出す。
流れを見る限りで、優先させるべきはあの女性の方かと、先ずは其方からと両の脚に魔力を込めると移動の準備を開始し、タイミングを見計らう。
転移に近い高速移動を終え、女性の側に立つと同時、その右手を女性の肩に置き、その姿を闘技場の端へと転移させる。その後即座にその場を離れ。闘技場内に漂う空気を乱すことなく一人の選手を安全圏へと避難させる。

次はと視線を転じ、今年の選手のなかでは良く話をしていたなと思いだしながらも、その青年の姿を視認し、そちらへ移動するべく準備を始める。こちらは『楽園』の少年が離れ始めていたため、それ程急ぐことも無いかと思いつつ、その青年の側まで移動すると、静かに声を掛ける。

「残念だったな。まぁ、『予選の英雄』が本戦へと進んだのだ。それだけでも快挙だろう」

言葉を掛けるが、返答があったとしてもそれは敗者が口に出来る只一言であるだけに、それを口にするのを待つことをせず、自分らしくもなかったなと自嘲気味に溜息を零しつつ右手を動かす。
それが急に止まったのは、返答があったからだった。

「巻き込みそうなので離れていてください」

最初、何を言われたのか解らなかった。いや、頭ではその内容を認識してはいるが、その言葉を発しているということが理解できなかった。
ふと背後で声が聞こえた。余裕のある、それでいて高圧的なまで

の『最強都市』の攻撃だろう。
そこにいる四人には、最早此方へ対する警戒も、興味を失ったかのように一欠けらさえ向けられていない。それもそうだろうと思いつつも、それこそがこの青年の狙いで在るということを悟ると、未だその役目を果たすことなく中途で止まったままの其の腕が震えるように動くのを止めることが出来なかった。

どの位の時間そうしていたのだろう。背後に聞こえる様々な音色、声音、足音に未だ意識は向けられずに、只時間の経過を無為に過ごし。そして意識をはっきりと取り戻したのは一人の声によってであった。

「ぎゃふん」

ハッとし、振り返った先で見られる光景は、こちらに背を見せ攻勢を誇る『最強都市』と、それに食らいつくように攻勢で対する『双璧』の二人。その奥に見える『楽園』の少年と、その少年と対峙し、頽れる男性。
其の瞬間、その少年と眼が合った。
その少年の視線は、此方を捉えた後、未だその場に蹲る足元の青年に向けられると、軽く頷く様な仕草をみせ、其の注意を『最強都市』へと向けた。

沖縄と宮崎の二人が其の勝敗を決し、その勝者たる沖縄の少年は此方を軽く見た後、其の意識を東京へと向ける。

現状の構図としては、東京対神奈川と沖縄の二対一になった訳なのだが、それを見ても相変わらず余裕の態度を崩すことなく、其の上何処か不敵に、口元に笑みまで見せてさえいるこの男に、その時ふと視界に入ったその背後の光景に、ゴクリと息を呑んだ。

『い・お・う』

その見えた光景と、先ほどの少年の言葉が結びつこうとしてグルグルと駆け巡る。そして導かれたその答えに、込上げる笑みを抑えるのに最大限の努力を払うことになった。

偽装

見るからに目の前の男は、後ろに対する警戒をしていない。それは予定通りではあるのだが、まさかあのような不測の事態でここまで上手く立ち回っていたのかと思うと、それがここまで予定通りの反応になるとはと思うと、それまでの怒りが薄れ、次第に笑みが込上げて来そうになる。

しかし、それを見せては不味いと、表に出すべきではないという警鐘を鳴らす思考に、其の変化を悟られまいと出来る限り自然に、警戒しているというように視線を少年へと向け、落ち着いたところでまた、此方に意識を向けさせるべく視線に威圧感を出来るだけ籠めて、東京の男を睨み付ける。

「怖いね、おぉ怖い怖い。そんなに睨まれないで貰いたいね」

「何が怖い怖いだ。どっから見ても余裕綽々な態度じゃねぇか」

「フヒヒ。サーセン」

視界の左端では、蹲る宮崎の男性に、あの魔法使いの人が手を触れ、退避させるべくその場から消えるのを眼にし、それにちらと意識を向けた後、また視線を戻す。
口ではあの様なことを言いつつも、まるで態度を変えない其の男。その背後へと。
先程までと同じように蹲り、未だその場に居る其の青年に。

其の顔を上げ膝を抱えていた其の右手がゆっくりと持ち上げられて、狙い定めるように東京の男へと向けられるのを捕らえると、自然に口元に笑みが浮かび。

「よぉ、東京。始める前に聞いておきたいんだけどよ。お前は優勝したら何を狙ってんだ？」

「フヒヒ。決まってるじゃないか。俺様専用専属メイドを所望する！」

「・・・・・・頭は大丈夫ですか？」

「フフン、これ以上無い程に冴え渡っている」

「もういい、それ以上言うな・・・・・・」

まぁまぁ、そう言わずにとでも言うように、両手を前に困ったような表情を見せるその東京の男に、沖縄の少年は、まるで『駄目な大人だ。こういう大人には絶対にならないようにしよう』とでも言うように、呆れた表情を浮かべている。

「では聞こう。そういう神奈川は優勝したら何を望んでいるのかを」

「フフン、決まっているじゃないか。綺麗で可愛くて素敵で家庭的で尚且つ性格も良く笑顔の似合う俺に優しい彼女が出来ますように、と」

それも捨てがたいと頷く東京。まるで汚物を見るように冷たい視線を向けてくれる沖縄。

「成程。しかし、勝者は一人。互いに見る素敵な夢は勝つことで得られる高尚なる願い。ならばやることは一つ。意地のぶつけ合いに他ならないということだ」

「そう、勝者は一人。だが、結果は見えている。教えてやろうか？それはな、お前はここで脱落だということだよ」

何を馬鹿なとでも言いたげに眼を細めつつも口元に笑みを浮かべた東京の男は、其処で其の表情をぴたりと静止させると、次いで耳にした二つの足音に勢い振り返り、振り上げられたそれを見。

「何と言う孔明の・・・・・・ぎゃふん」

其の言葉も終わらぬ間。未だ呆れた表情のままに、しかしその光景から眼を逸らさず、眼を離せないで居る沖縄の少年に右手を向けると、すらりと出てきた其の言葉を口にし、音を乗せる。

「八景島シーパラダイス」

ビクリと肩を震わせ、此方を見るその少年は、その言葉の向けられた先が自分であることを目視で確認し、目の前まで迫る白いイル

カの姿に反撃する余裕が無いことを悟ると、悔しそうに表情を歪める。

そして、其の口から零れるのは敗者として決定付けるたった一言の言葉。

それを耳にし、視線を転じる先に見えるものを確認する。

先程までの余裕の態度が見るも無残な、膝を抱え、蹲る男のその向こう。

相変わらず何処か頼りなさ気で、会う度に人を小馬鹿に扱うような、そんな何時もの態度を取って皮肉気な笑みを浮かべた、そんな青年の立ち上がったその姿を。

そんなその青年の姿を見て、俺は何故か嬉しそうに顔が綻ぶのを感じていた。

15

盛んに向けられるチラリチラリと伺うような視線に、せっつくような気配を探りつつも、繰り広げられる会話が少し面白かったのでその遣り取りが終わるまで待ってみようかなと考えてみたものの、そのチラ見の頻度がさらに増え、あからさまにこちらを見る機会が増えてきたのを見て取り、折角注意を引き付けるために話こんでいるようにみえてもそれじゃ駄目だろうと思いつつ、それを知って尚動こうとしない自分も強く言えたものでもないかと少しその考えに自重し、早速動きますかと僕は言葉を探す。

できるだけ速度がありそうで、尚且つ言葉短めがいいな、と。それでいて知名度がと考えて浮かんできた言葉は

「吉幾〇」

現われたのは薄汚れた袢纏にもんぺ、長靴を履き、手に鍬を持つ、中肉中背の一人の姿。隣に牛をセットに並び、それは『おら東京さいぐだぁ～』という声と共に、その人影プラスアルファは東京の男へと疾り出す。

しかし、なぜこんなポップで奇抜な動きなんだろう？まぁ、ここにいる選手達の認識がこうなんだろう。

その迫り寄る足音に慌て振り返る男の向こう。やけにいい笑顔の青年がその右手をゆっくりと持ち上げ、その動きに気づいていない沖縄の少年へと向け、言葉を紡ぐ。

其の光景に、僕の中で何かがガラガラと崩れ落ちる音が聞こえた気がするけど、きっと気のせいだろう。いや、うんまぁ、気のせいじゃないんだけどね。

「よぉ。何だその無念そうな顔は。東京は目論見どおり落とせただろぉが」

くそぅ、こいつ何で僕がそんな顔になったのか知ってるくせに、さも不思議そうに言いやがって。

「ん？あぁ、そうか。沖縄の少年と一緒に俺とやり合おうとか考えてたとか？」

あぁ殺したい・・・・・『とか？』って何だ『とか？』って。其の顔に渾身の右ストレートを繰り出せたらさぞすっきりするだろうけど、出来ないことを願ってもむなしいだけだ。でもあのニヤケ面だけはなんとかしないと精神衛生上よろしくない。それだけは何とかしてみようと、僕はその挑発に乗ることにした。

「まさか。それでも勝つ見込みが少ないし、違うことを考えていたに決まってるじゃないか」

いささか棒読み口調になってしまったけれど、別に負け惜しみを言いたくなかったからそうなった訳でもないという、いい訳っぽい思考を放り投げ、どう切り替えしてやろうかと考える。

「ただちょっとね。先刻口走ってた優勝したら云々ってやつが気になってね。ほら、前に三人で話してた時のこと覚えてる？　いやぁ、あの時の浮かれっぷりは演技だったんだねぇ」

其の言葉にあからさまに動揺を見せる青年は、慌てふためく様に

その闘技場の外周部、蹲る様に座る本戦の選手にして敗北後退避させられている一団の一人に視線を向け、それからこちらに向き直る。
何か人差し指を口元に当ててジェスチャーを送ってるっぽいけど、あれは何だろう？　気にしないでもいいかな。

「そ、そんな訳ないだろう、そんな。いや、お前こそ失礼じゃないか。先刻言った綺麗で可愛くて如何こうってのは彼女のことを言ったに決まってるだろ！」

そんな僕の無反応な態度にしどろもどろに言葉を発する。
それに対し、これくらいまだ序の口ですよ？と言わんばかりに僕は攻勢な構えを見せ、言葉を続ける。

「え？でも昨日あいつは性格が鬼だとか笑う悪魔だとか」

「ぎゃー！！　それ以上言うな！　　いや、その、お、俺がそんなこと言う訳ないじゃないか！」

「彼女にね、何でこんな男でいいの？って聞いたらさ、欠伸の出るような恋愛はもうごめんだみたいなね、一緒にいると楽しいみたいなこと言ってたんだけどねぇ。そっか、まぁしょうがないよね」

「やめろ！　心に響くことを言うな！　違うんだよ！　さっきの東京との会話は！　あれは仕方なかったんだよ！　あのノリで会話を続ける為に言っただけなんだよ！」

「その割スラスラ言葉出てたよね。ほんとの所、あれ本心でしょ？」

「黙れこの豚畜生！」

「じゃあ、優勝したら何を願うの？」

動揺が焦りに変わり、それを取り繕うように画策し、さらに畳み掛けられると情けない言い訳に逃げ、さらに逆切れまでしてくれた上に究極的な問いをぶつける。

予想通りに言葉に詰まったけれど、予想以上に面白い顔をみせてくれるその青年に、しかしその答えだけは予想できないだけに、何が出てくるかなと気楽に考えていた。当初の予定としては、こんな流れになるという考えはなかっただけに。

「そっ！　それは、ほら、あれだよ、あの、前にも言っただろ、ほら！」

「いや、ほらとかあれとか言われても。あぁ、何だっけ、死ぬまで禿げませんように？」

「お前が禿げろっ！　もういい！　これ以上何も言うな！」

あぁ、ついに泣きそうな顔にまで落ち込んで。其の声ですら絞りだすように悲痛に響き、その声を聞く度に胃が軽くなるように感じる。

とはいえ。とはいえ、だよなぁ。多少相手の感情を揺さぶった程度で、勝率が上がるかといえば微妙なところ。暫くすれば落ち着きを取り戻すだろうし、短期勝負で押すのが一番かな？

「《横浜》ベイブリッジ」

「佞武多祭り」

二人の間に現われる光が、まるで折り重なるように絡み合い

「《湘南》海岸」
「《津軽》三味線」

二人の間に漂う音が、まるで重なるように絡み合い

「《横須賀》港」
「《大間》マグロ」

二人の間に風ガ渦巻き、嵐の様に鬩ぎあい

「芦ノ湖」
「《六ヶ所》原燃再処理工場」

二人の間に空いた距離に、割り込むように侵食しあい

「《鎌倉》大仏」
「《青森》林檎」

踊るように、謡うように、微笑むように、悲しむように、怒るように

「江ノ島」
「《弘前》桜祭り」

儚く、幻想的に、脆く、華やかに、深く、叙情的に、眩く、別世界のような

どれほどの時間、そうしていたのだろう。
知名度の高い言葉は費え、次第に派手さは下火になりつつあるけれど、それでもなお色褪せない矢次早は攻防による彩は僕の眼を魅了し、次を、次をと言葉を急かす。これを言ったら次はこれを、これは既に使えないから別な言葉を。溢れ出る言葉に後押しされ、それでも未だ終わりの見えないその攻防も、やはり予想通りの結果を迎え始めていた。
知名度の高さで劣る為、押され始めていた。あちらの一つの言葉をこちらは二つ、それは次第に簡潔な言葉を繋げてようやく間に合うという所まで来ており、それでもいまだ諦めきれずに。
気がつくと、僕は笑っていた。こんな苦境にあっても楽しいと思えている。
そして、そんな気持ちは僕だけではないらしく、対峙し共にこの景色を作り出しているあの青年もまた、僕と同じく楽しそうに、嬉しそうにその顔に笑みを浮かべていた。

出来るなら、このまま暫くこうしていたい。
しかし現実はやさしくは無い。

せめてもう暫くはこのままに。
出来ても数十秒が限界だろう。

勝ち負けよりも、むしろそれこそが気がかりであるかのようにそんな夢のような理想を求める思考、と冷静に現実を見る思考を同時に頭に描き、その数十秒という思考すら理想でしかなかったとでもいうように、目の前に迫るそれに、僕は込上げる寂寥感を押し殺し、それを誤魔化すように深く息を吐いた。

そして、僕の口から出た物は、今日二度目となる敗北を告げる言

葉だった。
其の言葉は響き渡る歓声の豪雨に呑まれ、それに押し遣られるように膝から落ちる僕は、不思議と込上げてきた満足な気分を味わいつつ、その場に響く勝者を告げる大音量に賛同し、心の中であの青年に祝辞を送るように『おめでとう』と呟いていた。

15（後書き）

改めて読み直したところ、重複している箇所が在った為修正しました。

読み返しって大事ですね…。

16

眼が覚めると、体が悲鳴を上げるようにあちこちからの痛みが襲い、原因はと考えるのも馬鹿らしいほどに、硬いフローリングに横たえてある体を起こす。確かに寝相が悪いと言われることはあるのだけれど、しかしベッドから落ちて床にというのは初めてで、それを思うだけで心に遺る瀬無い気持ちがわきあがり始める。

それでも何とか立ち上がり、しかし何をする気力も湧くはずもなく、考えることすら面倒だとまたその体を横たえる。そこは勿論先程までと同じ場所ではなく、起き上がるまでそこに居たと思っていたベッドの上に。

十分な睡眠を経ての目覚めというよりも、むしろ体の痛みに眼が覚めただけとでもいうように、横たえた体は睡眠を求めるようにゆっくりと睡魔を迎え入れている。それにこのまま沈みこもうとしている微睡の中、思い出すように浮かび上がる景色に、そういえばそんな夢を見ていた気がするなと、また見れるといいなと、そんなことを思いつつ、ゆっくりと睡魔は意識を奪い――――

朝を迎え、ポカポカというよりはジリジリと炙るような朝の日差しに眼を覚まし、十分な睡眠に疲れの癒えた体を伸ばし、それと同時に詰めていた息をふぅと吐き出しゆっくりと起き上がる。

さて今日は何をしようかと、帰省後の初日だし、ノンビリと家でだらけようかなぁ等と考え始める。

立ち上がり、のそのそとパソコンを据えている机まで歩き、電源を入れると椅子に座る。

お気に入りの一覧を眺め、一番下にある項目に、こんなページ登

録したっけ？と首を捻りつつも、それがどんなサイトだろうかとアクセスするべくマウスを操作しポインタを走らせる。
画面に現われたのは、シンプルなデザインに纏められた文字数の少ない簡素なデザイン。
その中央にある文字は、お気に入りに登録されていた文字であり、その文字はリンクが張られていることを示され、とりあえずこれをクリックとその文字へとポインタを走らせる。
クリック後現われたのは、メッセンジャーに似たタイプの集合チャットの画面。
そして、参加者の名前の欄には在籍者を示す、五名の名前が見て取れた。其の名前もハンドルネームだとは思うのだけれど、まるで自分の所在地を示すかのようにその参加者の欄に見られる名前は都道府県の名前が並んでいた。

青森
沖縄
神奈川
東京
宮城

そこで自分が名前の入力もなく青森として参加していることに気がつき、次いでどこかでこんな名前の並びに見覚えがあるように感じ、次いで現われた文字に、ゆっくりと記憶が浮かび上がってくる。

神奈川　「よう、準優勝おめでとう」

見知らぬ部屋で目覚め、気を失う人々に困惑していた時、一人だけ置き上がるとそこで初めて話をした男の姿。

宮城　「久しぶり、でいいかな。まだあっちでの事はハッキリと思

い出せてないでしょ？」

それからその青年とは行動を共にする機会が増え、そんな僕達の中に加わることとなった一人の女性。その青年との数日に渡る数々の遣り取りが浮かび上がって来ては笑いを誘い、または哀れみを誘い。

沖縄　「こちらでは始めましてですね」

どこか通じる部分を感じる少年と、それまで感じてきた胃の辛さを忘れるように色々話していた場面が浮かび上がり、画面に浮かぶ言葉にすら、何処か優しい気持ちになれる気がした。

東京　「さっき聞いたんだが、野生の孔明はお前だって？」

最強の名で呼ばれ、その名の通りの圧倒感を誇り、ただ在るだけで脅威という一人の男の姿。

そして僕は、いまだ次々と浮かび上がる記憶に様々な感情を抱きつつも、その場に居る僕以外の人へと言葉を返すべくキーを叩いた。

青森　「おはよう。久しぶりって言うより、ただいまって感じ」

東京　「それで優勝の賞品に何を望んだんだ？」

神奈川　「世界平和」

宮城　「氏ね」

青森　「死んで詫びろ」

沖縄　「嘘ですね」

神奈川　「皆ひどくない？」

宮城　「似合わないってよりも、ありえないわね」

青森　「ほんとそれ」

東京　「勿体無い」

宮城　「それにしても、こっちに戻って記憶が残るとは思ってなかったわ」

青森　「あぁ、確かに。あっちで五日も過ごしたしねえ」

神奈川　「あぁ、それ俺のおかげ。褒めてもいいよ」

青森　「てーと？あぁ、賞品か。てことはやっぱあっちでのことは記憶に残らないようになってたの？」

神奈川　「らしい。つっても媒体を経由してって条件が付いたけど。ここのサイト

辿りつければ思い出すって感じにするのが限界っぽい」

沖縄　「願いを叶えるにしても、其の全てに対応できる程魔法とは万能では無いと
いうことですか」

東京　「もしや、俺の願いも無理だったのか？」

神奈川　「いや、それくらいは余裕でできるっぽいぞ。それ聞いた王様が嬉しそうに
笑ってたってさ」

宮城　「・・・・・あの国は滅びるべきだと思う」

東京　「それにしては、敗者への罰則とかあるんだが。あれ系の呪縛的な方が魔法
は向いてるってことか？」

神奈川　「ぶっちゃけあれ嘘だってさ。なんてーの？　モチベーションってーか、
やる気にさせる為？」

東京　「ｍｊｄ？」

宮城　「え、それ本当？」

青森　「言わされただけらしいよね。ほんとあの人苦労人だよね」

神奈川　「待て。ちょっと待て」

青森　「ん？」

神奈川　「お前それ何時から知ってた？」

青森　「あぁ、予選前？」

神奈川　「言えよ！聞いたすぐ後に俺にも教えろよ！何で黙ってんだよ！」

青森　「そうなりそうだからだよ。例えばだよ？　予選前に優勝優勝言ってやるき
　　漲らせてた欲望の塊みたいな男が、そんな罰則があるにも係わらず急に余裕
　　そうな態度で「あーやられちゃったー」とか言って負けて清々したみたいな
　　ことになってごらんよ。何かあると思うでしょ？」

宮城　「うん、無いね。確かにそんなの見たら色々疑いたくなるわね」

沖縄　「罰則はブラフ、下手をすれば褒賞ですらもと思いますね」

神奈川　「何これ、何この空気。もしかして俺あやまらないといけない流れ？」

東京　「死んで詫びるべきだと思う」

宮城　「東京がいいこと言った」

青森　「もう一度、あっちに行って同じことを出来るとしたら、皆はどうする？」

神奈川　「あー、どうだろ。確かにあれは楽しいっちゃー楽しいんだけど、また知らない奴ばっかに囲まれるってのもなぁ」

宮城　「うーん、私はあんまり行きたいって気にはならないなぁ」

東京　「今度こそは優勝する」

沖縄　「まず無理な話なんでしょうけど、もう一度行けるのだとしたら、また行きたいとは思いますね」

青森　「色々裏事情というか、知られて無い方がいいこと知っちゃってるしね。
でも行けるとしたら、僕も行きたいね。あれは、楽しい。
でもだからこそ、僕以外の誰かにもあれを体験して欲しい」

神奈川　「あー、それは解る。ほんと最後のあれ時間を忘れてたって感じだったし」

宮城　「ほんとちゃっちゃと終わらせて欲しかったわ」

東京　「上に同じ」

神奈川　「いい事言ったのに。青森がいい事言ったのに」

青森　「フヒヒ」

東京　「フヒヒ」

宮城　「フヒヒ」

沖縄　「乗りませんよ」

神奈川　「何この無駄な流れ」

青森　「まぁ。とりあえず僕は今日暇だけど、皆はこの後どーするの？」

神奈川　「俺も特に予定はないな」

宮城　「私は昼過ぎには出かける」

東京　「外せない用事があります」

沖縄　「もうそろそろ学校に行かないといけません」

青森　「それじゃあ時間の許す限り、色々話しよう」

カタカタと鳴るキーを叩く音。時折聞こえる笑い声や、相槌を打つように間延びした声、驚きを示すやや大きめな声や突っ込みを入れるようにそれは無いという言葉を発しては、またキーを打つ。

それは一人減っては一人増え、また一人、二人と増えては一人消えと繰り返しつつも昼を過ぎ、夕暮れの日差しも消え去り、夜を迎えてもまだ続けられていた。

ふと気が付くと、もう間も無く日付が変わるという時間を示す時計に、ほぼ一日中こうしていたのかと驚くと同時、それ程の時間話ても未だ話したいことの多さに改めてあちらで過ごした数日の事を

思い描く。
それでも明日は朝早くから約束があり、これ以上はと考え、今日はこれまでという言葉をキーを叩いて入力し、それに応える言葉を数秒見つめてから退室にポインタを重ねる。
再び現われた簡素なデザインのページ。

其の中央、先ほどまで居たチャットルームへと飛ばすリンクの張られた一つの文字。
それは、あちらで体験した一つの祭りを指し示す、思い出深い名前。

『光国祭』

それに数秒視線を留め。
名残惜しそうに微笑みつつも、画面を滑るポインタはパソコンの電源を切るべく左下へと動く。
シャットダウンという文字にポインタが重なり、その数秒後にブラックアウトした画面を確認した僕は、さて明日に備えて寝ようかなと、ゆったりとした足取りでベッドまで歩き始めた。

16（後書き）

これにて光国祭の完結です。

今作が私の処女作なのですが、その、拙い部分が多々目に付いたかと思います。

このサイトを知り、様々な物語を読み、それに影響を受け自分でもと思い挑戦してはみたのですが、なかなかに頭に思い描く情景や背景、光景や状況を言語化するというのは難しく、さらに単調にならないように語彙を選ぶというのにも四苦八苦し、それでも出来る限り良くしようとは頑張ってみたのですが、どうもこれが現状私の限界っぽいです。

別作にも着手しているのですが、あちらはガラリと雰囲気を変えて頑張ってみてます。何処までの物を綴れるか、おっかなびっくりという心境ですが。

これまで拙作をお読み頂きありがとうございました。

今後も何処かで出会えましたら、また物語の終わりまでのお付き合いを。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1970n/

光国祭

2010年11月3日01時30分発行